

GLOBAL DIALOGUE

2.4

グローバル・ダイアログ：国際社会学会ニュースレター
第2巻 第4号 (2012年6月号)

Whither Chinese Sociology?

中国社会学はどこへ向かうのか?

Liping Sun

Sociology and Celebrity

社会学と著名人たち

Robert Van Krieken
Vedat Milor

Violence and Protest in Latin America

ラテンアメリカでの暴力と抵抗

Johanna Parra
Nadia Rodríguez
Milton Vidal

- > ベイルートでの理事会報告(2012年3月19-23日開催)
- > ISA博士課程学生研究会(2011年11月開催)
- > 社会学を介した旅路
- > アラブにおける蜂起
- > 一つの社会学か、あるいは多くの社会学か
- > イラン翻訳チーム紹介
- > フランス語圏社会学のグローバルな居場所
- > ヒストリー・コーナー：アーカイヴからAISLFをさらに知る
- > インド社会学会の課題
- > アンカラ大学におけるパブリック・ソシオロジー
- > 未来を民主化する

NEWSLETTER



International
Sociological
Association



VOLUME 2 / ISSUE 4 / MAY 2012

GDN



ISA-on-line – The Future of Sociology

ISAオンライン:社会学の未来

グ

ローバル・ダイアログは創刊2年目を迎えました。ページ数は当初8ページだったのが現在は30ページになり、また5言語で創刊したのが14言語になり、普通のテンプレートで編集していたものが今は特別なデザインの状態となり、そしてニュースレター形式であったのがマガジン形式になりました。また電子版として発行されてもおります——しかし私はどこに行くにもその行先に関する言語版を印刷したもので重くなった鞆を携えているのですが——『グローバル・ダイアログ』は世界の出来事を社会学のレンズを通じて伝えており、またISAや各学会での出来事、社会学的討論、特別コラム、各国の社会学の動向などについてのレポジトリともなっています。そしてもっとも重要なことは、翻訳チーム内と翻訳チーム間でダイアログ(対話の機会)が創りだされていることです。例えば本号では、ワルシャワのPublic Sociology Laboratoryの若く情熱にあふれたメンバーたちが『グローバル・ダイアログ』ポーランド語版創刊に至る機会となった学会——『グローバル・ダイアログ』誌上で行われた、社会学の全球的そして普遍的な性質についての討論の延長線上に位置づけられる学会——について報告しています。つまり、本誌発刊の成果のひとつとして、若手研究者たちによる各翻訳チーム——世界の社会学について多様な未来像を培っている——を繋げた形でのネットワークを挙げるができるでしょう。

以上と類似した方針により、グローバル・コース『パブリック・ソシオロジー・ライブ』(Public Sociology, Live!) も運営されています。ここでは、一連の素晴らしい社会学者たち、それも彼らが居住・調査している国々に深く根差した人たちが、カリフォルニア大学バークレー校の学部生たちに向けた形で、自分たちの研究の経験について語っています。(このライブを開催するにあたり)スカイプを使うことによって、彼らのように多忙な社会学者たちは自分たちの研究を中断する必要がなくなります。そして彼らによる各対話は、インターネットを通じてどなたでもアクセスしていただけるよう、ISAのホームページに録画・投稿してあります(<http://www.isa-sociology.org/public-sociology-live/>)。例えばそこで見られる録画は、バルセロナ、テヘラン、ヨハネスブルグ、サンパウロ、キエフ、そしてオスロ在住の学生と教師たちのグループによって閲覧されており、彼らは閲覧後、自分たちの討論についての要約を、フェイスブック内のISAのページ([facebook](#))に投稿し、その結果としてさらなる討論や討議を生成させています。このように、私たちは他者と互いにつながることによって自身について学び、その多様性によってともに結ぶグローバルレベルでの社会学者たちのコミュニティをはぐくむような、ハブ機能、研究室・研究施設を創っているのです。

社会的メディアは、それがたとえ全世界の聴衆にむけた相互行為であっても、対面式での相互行為を強め、豊かにすることができます。そこで、本号で紹介するLaleh Behbehaniによって描かれたビデオ・シリーズ『社会学を介した旅(Journeys through Sociology)』は、それぞれ遠方に居るISA理事会メンバーたちに、彼らが何を社会学にもたらしたのか、そしてその道程で彼らが直面した難題は何であったのかについて尋ねています。ほとんどのISA会員たちは、これまでほとんど会員のリーダーたちの肉声を聞く機会が無かったと思われそうですが、今やそれはマウスでクリックすることにより可能になりました。そしてこれは、原則として、世界のどこからでも、他者が複製・修正・改良することができるという例でもあるのです。インターネットは教育を退廃させるものだといえる場合もありますが、他方では教育を高めることができます。またインターネットは、コミュニケーションを希薄にする場合もありますが、同時にコミュニケーションを豊かにもすることもできるのです。私たちがインターネットをコントロールするかぎり、それをどう使うのか決定できるのです。(芝真里訳)

『グローバル・ダイアログ』は年間5回、14か国語にて発行されています。ISAのウェブサイト([ISA website](#))にても閲覧いただけます。なお投稿を希望される方は、マイケル・ブラウワイMichael Burawoy(burawoy@berkeley.edu)までお願いいたします。



Whither Chinese Sociology? In this interview, leading Chinese intellectual and sociologist Liping Sun describes the place of sociology in Chinese public life and explains why China is heading for stagnation.



On the Celebrification of the Academy. Robert Van Krieken writes about the way celebrity has invaded the academy, creating a Hollywood-like star system in which “winner takes all,” and leading to a corrosive branding of scholarly work.



From Sociology Professor to Culinary Guru. Looking for another career? Turkish sociologist Vedat Milor tells us how he became a television personality with a cult following – all based on his gastronomy program shown on prime time TV.

> Editorial Board

編集委員会

編集長:

Michael Burawoy.

編集主任:

Lola Busuttil, August Bagà.

本部編集委員:

Margaret Abraham, Tina Uys, Raquel Sosa,

Jennifer Platt, Robert Van Krieken.

編集顧問:

Izabela Barlinska, Louis Chauvel, Dilek Cindoğlu,
Tom Dwyer, Jan Fritz, Sari Hanafi, Jaime Jiménez,
Habibul Khondker, Simon Mapadimeng, Ishwar Modi,
Nikita Pokrovsky, Emma Porio, Yoshimichi Sato,
Vineeta Sinha, Benjamin Tejerina, Chin-Chun Yi,
Elena Zdravomyslova.

地域編集委員

アラブ諸国:

Sari Hanafi, Mounir Saidani.

ブラジル:

Gustavo Taniguti, Juliana Tonche, Pedro Mancini,

Fabio Silva Tsunoda, Célia da Graça Arribas,

Andreza Galli, Renata Barreto Preturlan.

コロンビア:

María José Álvarez Rivadulla, Sebastián

Villamizar Santamaría, Andrés Castro Araújo.

インド:

Ishwar Modi, Rajiv Gupta, Rashmi Jain, Uday Singh.

イラン:

Reyhaneh Javadi, Shahradsch Shahvand,

Fatemeh Moghaddasi, Saghar Bozorgi,

Nastaran Mahmoudzadeh, Najmeh Taheri,

Tara Asgari Laleh, Milad Rostami.

日本:

西原和久(日本語版翻訳監修)、芝真里(日本語版編集
事務局幹事)、姫野宏輔、高見具広、岩館豊、池田和弘、
福田雄、三部倫子、佐藤崇子、小川翔平、井出知之、堀
田裕子、小坂有資

ポーランド:

Mikołaj Mierzejewski, Karolina Mikołajewska,

Jakub Rozenbaum, Michał Chelmiński, Emilia Hudzińska,

Julia Legat, Adam Muller, Wojciech Perchuc,

Anna Piekutowska, Anna Rzeźnik, Konrad Siemaszko,

Zofia Włodarczyk.

ロシア:

Elena Zdravomyslova, Anna Kadnikova,

Elena Nikiforova, Asja Voronkova.

台湾:

Jing-Mao Ho.

トルコ:

Aytül Kasapoğlu, Nilay Çabuk Kaya, Günnur Ertong,

Yonca Odabaş, Mustafa Aykut Attar.

メディア・コンサルタント:

Annie Lin, José Reguera.

> In This Issue 目次

Editorial: ISA – on – line – The Future of Sociology

ISAオンライン:社会学の未来

2

Whither Chinese Sociology?

Interview with Liping Sun, China

中国社会学はどこへ向かうのか?孫立平氏へのインタビュー

4

> CELEBRITY 著名人たち

On the Celebrification of the Academy 学会の名声主義について

by Robert Van Krieken, Australia

6

From Sociology Professor to Culinary Guru

有名人への転身——社会学教授からカリスマ料理評論家へ

by Vedat Milor, Turkey

8

> VIOLENCE AND PROTEST IN LATIN AMERICA

ラテンアメリカでの暴力と抵抗

The Violence of Emeralds エメラルドの暴力

by Johanna Parra, Colombia

11

Land Restitution in Colombia コロンビアにおける土地返還問題

by Nadia Rodríguez, Colombia

13

The Student Movement in Chile チリの学生運動

by Milton Vidal, Chile

15

> WHAT'S HAPPENING AT THE ISA? ISAの近況

Executive Committee Meeting in Beirut, 2012

ベイルートでの理事会報告(2012年3月19-23日開催)

by Michael Burawoy, USA

17

PhD Laboratory, November 2011 ISA博士課程学生研究会(2011年11月開催)

by Tina Uys, South Africa

20

Journeys through Sociology 社会学を介した旅路

by Laleh Behbehani

21

> CONFERENCES 学会

The Arab Uprisings アラブにおける蜂起——社会学的观点と地理的比較から——

by Amina Arabi and Julian Jürgenmeyer, Lebanon

23

One or Many Sociologies? A Polish Dialogue

一つの社会学か、あるいは多くの社会学か——ポーランドからの議論——

by Mikołaj Mierzejewski, Karolina Mikołajewska,

and Jakub Rozenbaum, Poland

25

> SPECIAL COLUMNS 特別寄稿

Introducing the Editors: The Iranian Team イラン翻訳チーム紹介

by Reyhaneh Javadi, Iran

27

The Global Place of French-Speaking Sociology

フランス語圏社会学のグローバルな居場所

by André Petitot, Switzerland

28

History Corner: More on AISLF from the Archives

ヒストリー・コーナー:アーカイヴからAISLFをさらに知る

by Jennifer Platt, UK

30

> FROM THE REGIONS 各地域より

Challenges Facing the Indian Sociological Society インド社会学会の課題

by Ishwar Modi, India

31

Public Sociology at Ankara University アンカラ大学でのパブリック・ソシオロジー

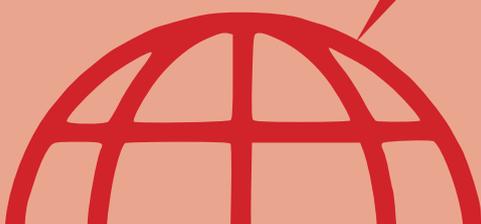
by Günnur Ertong and Yonca Odabaş, Turkey

32

Democratizing Futures 未来を民主化する

by Markus S. Schulz, USA

33



> Whither Chinese Sociology?

An Interview with Liping Sun

中国社会学はどこへ向かうのか？孫立平氏へのインタビュー

このインタビューは、マイケル・ブラヴォイによって企画され、沈原教授、胡麗娜およびXiuying Chengの仲介により実現した。孫立平は、北京の清華大学の社会学部教授であり、中国で最も著名な社会派知識人の一人である。



Leading Chinese sociologist, Liping Sun, making a fine point about the transition trap.

マイケル・ブラヴォイ(以下、MB):最近、中国の成長の行き詰まりや停滞、あるいは「過渡期の陥穽」「transition trap」とあなたが呼ぶ傾向について書かれていますね。この「過渡期の陥穽」とはどのような意味でしょうか？

孫立平(以下、LS):過渡の陥穽とは、変革の過程で得られた権益によって、その先の変革が停滞することを意味します。変革によって権益を得た人びとは、その現状を維持しようと、その過渡期の性質によって制度を硬直化させ、彼らの利益を最大化するための「混交制度」を確立しようとします。これらのもくろみは、社会一経済的な発展に歪みをもたらし、経済および社会問題を山積させます。ソ連や東ヨーロッパのそれと比較して、中国の変化は段階的なモデルとみられ、そしてこの事実こそ問題が含まれています。それは、変革過程の初期の成功が、その後の障壁となるということです。

MB:それは具体的にはどのような意味をもつのでしょうか。

LS:中国の経済成長は、国家による資源の一元的独占と、強力な行政主導によって成し遂げられました。この特徴的な経済発展のモデルは、国家へたかろうとする墮落した官僚によって基礎づけられました。だが、この強力な官僚主義の拡大は、「法の支配」による操作を通して、本当の市場経済へ向かうさらなる変革を妨げてきました。

MB:あなたは中国でよく知られている社会派知識人です。このことはあなたにとってどのような意味を持ちますか？実際のところ、あなたは社会学的知識を多様なオーディエンスに対してどのように発信してきたのでしょうか？そしてあなた自身、パブリック・ソシオロジーからどのように影響を受けてきたのでしょうか？

LS:「伝統的」な社会学と「パブリック」な社会学との違いは、次のように言うことができます。伝統的 sociology における主な関心は、社会生活にかんする知識を生み出すことでした。しかしこの知識はまた、予期せぬ結果として、「間接的に」社会に影響をもたらします。

>>

一方、パブリック・ソシオロジーもまた社会にかんする知識を生み出しはしますが、その主な関心は社会に影響を与えることです。ロバート・マートンの言葉を借りるとするならば、伝統的社会学の顕在的機能は知識を生み出すことであり、その潜在的機能は社会に影響を及ぼすことでした。そしてパブリック・ソシオロジーはちょうどその反対であるといえます。

この二つの社会学の間にある違いは、研究対象の選択と、結論の導かれ方によって表れます。われわれが研究のトピックを中国で選ぶ際には、最も重要で答が求められている社会問題は何か、ということに重点が置かれます。それはたとえば、過渡的段階における社会構造の変化や、社会矛盾やコンフリクト、過渡期の陥穽にかんするわれわれの研究がそうです。われわれのゴールは明確です。問題についての大衆の理解に影響を及ぼす結論を導き出すこと、そして政府の政策立案過程にまで影響を及ぼすことです。影響力を与えるには、三つの道筋があります。学術雑誌で研究論文を発表することにより学術研究の方向性に影響を与えること、(ツイッターなどのソーシャル・メディアを含む)公共のメディアでの発言を通して大衆の理解に影響を与えること、そして特定のトピックにかんする研究報告書を作成し政府のニュースメディアやソーシャルメディアにおける刊行物を通して彼らに影響を与えることです。しかしながら、われわれは通常、社会運動と直接的に関係することはありません。

MB:あなたは現代中国における社会学の役割や機能をどのように見えていますか?

LS:現在中国は、劇的な社会変化のただなかにある過渡的社会であるがゆえ、社会学が公共の生活にかんしてより大きなインパクトを持っています。この時代、社会学は政府の方針だけでなく、公衆の考え方にも影響力をもつことが可能なのです。それゆえ、郷鎮企業(TVEs)のように社会学者が提唱した産業化モデルや、地方と都市の統合的発展にかんする提言が、ローカルなレベルにおける国家主導の政策に取り入れられたのでした。「コミュニティ=社区」のような、社会学者によって導入された理論的概念が、国家の政策文書のキャッチフレーズや、単位制労働解体後にいて人びとに推奨された日常生活の実践となったのです。

MB:中国の社会派知識人のジレンマはどのようなものですか?それについて何か書いたり発言することが憚られることはありますか?あるいは、そのようなデリケートな問題に対処する特別なやり方があるのでしょうか。国家の批判者としてあなたが留まり続けることがどのようにできるのでしょうか。

LS:実際のところ、現在の中国では政治問題にかかわる発言することに多くの制限があります。ただそれと同時に、あなたがたが想像されているよりも社会派知識人には[議論]空間が与えられていることは記されるべきでしょう。公共の問題の多くは直接的に発言することが可能です。いくつかのデリケートな問題についても「機転のきいたひねり」を通して表現することはできます。それはたとえば、あるときは歴史について語りながら、実のところ現実の問題について語ったり、またソ連や東ヨーロッパについて話しながら、実際は中国のことがらについて話すことができます。また、インターネットやブログ、ツイッターが登場して以降、これらの新しいメディアに対する規制が緩かったこともあり、デリケートな問題について直接的に議論する空間が飛躍的に拡大しました。さらに付け加えるべきことは、社会学の客観的性質と、根拠に基づく議論、すなわちその科学的態度が、公共の問題にオープンに取り組む空間を拡大させたと言えるでしょう。

MB:あなたはどのように社会学に出会ったのですか?あなたが

農民のオーラル・ヒストリーのプロジェクトに長年携わってきたことは存じ上げていますが、そのような社会学的研究からどのようなことを学ばれましたか?

LS:私は元々メディアを専攻していましたが、大学四年生のときに社会学に専攻を変えました。それはちょうど、中国社会学が30年間の空白を経て再建されようとするときでした。1980年代の私の研究テーマは近代化でした。なぜなら当時中国社会にとって、それが中心的な問題であったからです。地方におけるオーラル・ヒストリーにかんする私の研究が始まったのは1996年のときでした。

そこでは、地方社会のデータを収集することで、農民の日常生活とそれを通して観察される「共産主義的な実践論理」を理解することが目指されたのです。われわれは、「文明の変遷」の過程として、すなわち日常実践に埋め込まれ、社会生活を組織化するプロセスとして中国の市場改革を分析したかったのです。これが、改革期の経験について地方の農民の方々に私がインタビューした理由でした。

MB:あなたの目から見たここ30年の社会学の変化はどのようなものでしたか?あなたは将来の中国社会学にどのようなヴィジョンを見出しますか?

LS:アメリカの学術研究は知識の集積に関心を払い、ヨーロッパの研究は諸々の価値が焦点となります。一方、中国はリアリティに目を向けます。つまり、中国の学術研究はリアリティに重きを置く伝統がありました。しかし、アメリカ社会学の影響やその他の要因により、今日の中国社会学はリアリティへの関心を薄めつつあります。今日の社会学は、社会というよりも、社会学それ自体の研究になってきているように見えます。たとえそれが社会を研究するものであるときでさえも、それは散逸した知識を生み出す傾向にあります。

わたしは常々、社会の移り変わりを研究すること、とりわけその諸々の過程と出来事を検討することの重要性を信じてきました。この点は、社会学自体の発展にかんする研究であっても同様に重要です。近代に生まれた社会学の創始者たちは皆、資本主義の文明を説明しようとしてきたのです。一方、共産主義は、人類史におけるもう一つの重要な文明を明らかに提示しています。それは西洋資本主義と著しく異なる、一群の制度と価値と論理をもち、それは近年、歴史的な変遷を経験してきました。この共産主義文明の特質、論理、および変化のプロセスについての研究は、現代社会学、ひいては社会科学全体への新しい刺激と動機となるべきだと信じています。(福田雄記) ■

> On the Celebrification of the Academy

学会の名声主義について

by Robert van Krieken, University of Sydney, Australia, and ISA Vice-President for Finance and Membership, 2010-2014

ロバート・ファン・クリーケン(オーストラリア:シドニー大学、2010-2014年ISA副会長(財務・会員担当))



Pierre Bourdieu – a celebrity against celebrification.

名声分析を要求してきたが、科学的研究は「名声社会」の形成プロセスとダイナミクスの格好の例とするいくつかの証明がある。

名声に関する古典的議論は、ロバート・ミシェルなどの著作にあるが、C・ライト・ミルズは、あらゆる種類の競争のダイナミズムが、特定の個人を著名人とする事、つまり競争の場にいる他の人びとにとって、認識上・実践上の参照点として機能する高度に視覚的な「行為者」とすることを裏打ちするあり方を論じた点で、重要な貢献をした。パワー・エリート(Oxford, 1957:74)においてミルズは次のように書いている。

アメリカでは、このシステムは、小さな白球を誰よりも効率よくかつ上手にグラウンドにある一連の穴に打って入れられる人が合衆国大統領への社会的な近道を手にする事に要約されよう。おしゃべりしているラジオ・テレビの芸能人が産業界の重鎮、内閣のメンバー、軍高官の予備軍になる。それはその人が最もふさわしいことを意味しないように思われる。ほかの全ての者との競争に勝ち抜いた限りにおいて、彼は著名人なのである。

これは完全に正しいわけではなかった。大統領への近道は、小さな白球をきわめてうまく扱える人よりも、ロックスターである。大事な点は、最も広範に知名度・認知度をもちうるということが、最初に何によって認知されたかとは別個に、それ自体として資源や価値になるということである。

ロバート・マートンは、聖書マタイ伝25:29に基づき、学術的業績においてこの問題を「マタイ効果」と特徴づけた。マートンは、ノーベル賞を受賞した科学者たちが、彼らの研究が同僚研究者と比べて相対的に優れているかどうかとは関係なく、同僚よりもかなり多くの注目を得ているという点を論じた。学術的な業績に対する大きな注目は、その世界にいるかぎり自己増殖的な傾向にある。これは1971年にハーバート・サイモンが、情報と知識が過剰の際に、希少になりそれゆえに重要なものとなるのが、他者よりも一つの方向においてもしくは一つの目的に対して正しく認知される能力である「注目」であると指摘したことで精緻化された。注目は、リチャード・セネットが、特定のミュージシャンがただすぐれたミュージシャンだというのを超えて、さらなる注目を得るまでに至り、音楽界を席卷するまでにな

>>>

今日の大学では、学問コミュニティをおおよそ以下の3つのクラスに分ける断層が長大化していることが明確に確認できる。

- ほとんどもしくは全く教育的・管理的な責務を果たさなくともよい、知名度の高いエリート研究者
- より多くの優れた研究への要請と増え続ける数の学生を教育することの両者の間での軋轢にさらされている教育・研究スタッフからなる「中間層」
- きわめて不安定できびしい労働条件に直面し、いつかはフルタイム・常勤の職に就きたいと願っている、拡大する臨時・パートタイムの教師・研究者プロレタリアート軍

この傾向を分析するやり方はいくつかあるが、ここではある種の「名声的合理性」も作用しているという点について、ちょっとした考察を提示したい。俳優・女優・テレビタレント・スポーツのスターなど、名声として、我々が通常認識する社会的象徴を裏打ちする社会的・経済的仕組みと、世界中の大学に影響を及ぼしている変化とは関連がある。私のより大きなプロジェクトでは、不平等・アイデンティティ・権力・統治のような社会学の中心的な概念関心に対して

ることを、音楽に関係した「スター・システム」と呼んだように、希少な資源、流通する「特権的な財」である。

世界的な格付けへの志向の増大と業績の測定・評価の方法の着実な改善は、個々の研究活動、大学、世界規模で同様の競争のダイナミクスを生み出す。そして競争あるところに名声(スター学者・研究者・大学など)が作り上げられる。引用という基準はその研究がどの程度影響力があるかを示すが、同時にそれはその著者がどの程度学会で著名人であるかを示す。我々がブルデューなどを参照するのは、単に分析にとって多大な影響をもつからばかりでなく、我々がブルデューについて知っているということを示すものでもあるからだ。

学術分野での名声に関する現在の仕組みは、3つのレベルで機能している。すなわち、個人レベル(通常は研究者、まれに教師)、機関レベル(大学)、そして国家・地域レベル(国もしくは国家群)である。すこしメタファーを拡張しすぎかもしれないが、多くの点で彼らが求めている(もしくは求めるようにさせられている)のは、学問分野・世界的な大学のシステムのキム・カーダシアン化である。[社交界の名士]キム・カーダシアンが彼女の認知度によって後援やイメージ・ブランドを通じて稼げることができているように、格付けは大学にとって、学生の入学者数、大学の社会的地位、そして多くの後援者・献金者の支出額、政府に影響を与えるために重要なのである。これはなぜ大学が多大の時間と金をかけて「ブランド」を発展させようとしているかの理由でもある。

大学の変化に対応した方法として名声の社会学的分析から何を教訓として得られるだろうか。ここでは詳細に分け入る余地はないが、はじめにいくつかの可能性を示唆することができる。まず、我々が見ているのは「注目」の生成・分配の機構であり、また、極めてよく争点になる資源とは注目されることであって、何が創造されたかという学術的価値ではないということ、これが大学における地位のゲームに対して懐疑的な感覚を抱かせうるとい認識である。実力主義として提示されることが実際は特定の側面で「名声主義」であることが、実際に「注目への闘争」に関する多くの危機的な傾向に対する見方を提供してくれる。

第2に、名声が我々の参加しているゲームである場合、名声に関するより広い場で何が起きているかを観察し、学術活動において同様の戦略を適用することができる。我々は皆、アンディ・ウォーホルが「将来、誰もが15分だけ有名人になる」と述べたことを知っているが、後に彼はそのくだりに飽き、「15分後には誰もが有名になる」と変えることを希望していた。ますます多くの場において、よく目にし広く認知された個人(別名・著名人)が拡散するメカニズムを目にすることができる。

昔のハリウッドのスター・システムのように、現在作動している学者としての地位の階層のかわりにスターになるかもしれないかどうかでなく、良質で有用な仕事であると考えられる多様な研究ネットワークを含むアナロジーにとどまることによって、別種の「アートシアター」の学者のような「下からの」認知・承認の独自の仕組みを生み出すことも可能である。学問のスターダムに集中する「中心の凝視」に誘惑されるのを許容するのではなく、近年の大学で進行しているように思われる「勝者全部取り」の論理を拒否し、お互いを正しく判断すること、それは可能なのである。(高見具広 訳) ■

> Becoming a Celebrity:

From Sociology Professor to Culinary Guru

有名人への転身——社会学教授からカリスマ料理評論家へ

by Vedat Milor, Istanbul, Turkey
Vedat Milor(トルコ:イスタンブール)



Vedat Milor, Culinary Guru – not too happy with his food.

8

私

の目の前にあるテレビの画面上の人物は、スピリチュアルな会合に出席して、深い祈りを捧げている、と人びとは思うかも知れません。テレビの中の人物[私]は両手で頭を抱え、半分閉じた目でただ一点を見つめています。突然、「私」の携帯電話がポケットから飛び出て海へ落ちます。若干のざわめきがあってから、カメラは、シェフのエプ

ロンを着ていて前歯を2本欠いているスレンダーな男性を映し出します。「私」は、携帯電話を修理するように、ウェイターたちに怒鳴っています。「私」は、不思議なことに、このことを不幸な出来事だとは思っていないようです。その代わりに、「私」はスレンダーなシェフのほうを振り向いて、「なぜ、あなたはこの料理で、シェリー酢を使わずにリンゴ酢を使ったのですか？」と尋ねるので

す。

私は思わず笑ってしまいました。私は、疑念と感興が入り混じった目で自分[私]を見えています。しかし、これは「リアリティ番組[訳注:素人出演者を主役とするテレビ番組のこと]」ではありません。これは、トルコのメジャーなテレビ局であるNTVが週末のゴールデンタイムに放映する、私が知っている中では唯一の料理テレビ番組です。そして私は、その番組のスターなのです。レストランを訪ね、多様な料理を味見して、味と素材の組合せのクオリティについて明確

>>

な判断を下し、シェフに対して声を上げて批判し、説明を要求するのです。レストランにワインのリストがあれば、それもそれぞれのコースでグラスを注ぐよう頼みます。そして、ワインの品質とその成功の度合いの両方について、意見を表明するのです。私は2人のカメラマンと1人の番組プロデューサーと旅をします。私たちの訪れる先のレストランのほとんどはトルコにあります。ローマ、カタロニア、ジョージア、シリアやレバノンに行ったこともあります。それぞれのレストランを訪問し終わると、2〜3分の間、一般的な評価を行ったのちに、レストランに星を与え、1つ星から5つ星までの格付けをします。私たちが訪問する前は閑古鳥の鳴く店であったとしても、私が4つ星や5つ星をつけたレストランは、番組後には大ヒットし、多くのお客が店に入りきれなくなるのが普通です。

そういう私は、料理人なのでしょう。か？ 答えはNoです。私は、卵を割ることすらほとんどできません。それでは、私は有名人でしょうか？ 答えはYesです。通りにいる人々は、私に気づくといつも写真撮影を求めてきます。また、多くのインターネット・フォーラムにおいて、私に関する書き込みがあります。彼らは私の動機やパーソナリティについて、際限のない考察を行っており、私の私生活のことに強い興味があるようです。「どのようになりますか」と尋ねる大学生たちからの手紙もずっと届きますし、中学生の親たちから、中学生の「アイドル」である私に、彼らが将来大きくなったら「Vedat Milor」のようになりたいと考えている子供たちのために、一筆書くことを求められることもあります。

では、いったい私は何者なのでしょう。か。これらのことはどのようにして起こったのでしょうか。30年前に戻って考えてみましょう。私は当時、トルコのボスポラス海峡大学経済学部で学士号を取得した後に、バークレーの社会学部に入学した熱心な大学院一年生でした。スラッファ、新

ケインズ主義、アルチュセールやフランスのマルクス構造主義者などに魅了されていました。しかし、バークレーで私は、エスノグラフィックな手法を「発見」し、「徹底的な事例研究」で社会変化の力学を理解することに興味を抱くようになりました。私の博士課程の指導教授だったMichael Burawoyは、トルコのような資本主義経済に従属する国家の「自治」に関する疑問を解消し、理解するための理論的なフレームを開発することをより容易にするのが、比較分析の手法である、と私を説得しました。そういうわけで、分析方法について熟考を重ねた後に、私は「中心部の国」と「周縁部の国」で、国家政府と階級関係の構造的な差異を浮かび上がらせるために、第二次世界大戦後のトルコとフランスにおける計画経済を比較することを選びました。

この点で私は、フランスワインの発見とそれに魅了されてしまったこと、計画経済の理念型的なモデルとしてフランスを選んだこと、この二つのことが「意図せざる結果」であり、「無実である」と言いたい誘惑にかられます。しかし実のところは、そうではありませんでした。バークレーのカーミット・リンチ・ワイン商店で、1982年物のブルゴーニュワイン「アンリ・ジャイエ」[訳注：『ブルゴーニュの神様』と呼ばれるワイン作りの名人]に10ドルを払った時から、私はすばらしいバーガンディー・ワインの虜になっていたのです。留学生宿舍の自分の部屋では、ラジオすら買えなかったにも拘わらず、おいしいワインを飲んでいました。上質のブルゴーニュワインを飲むことは、私の心に深く染み入る経験でした。上質のブルゴーニュのレッド・ワインは、多面的な香りをして、味覚を刺激する気まぐれな性質と、驚くほど強力なスパイスのきいた後味によるエレガントな女性的きめ細やかさがあります。トルコにおけるケナン・エブレン将軍の軍事支配や、アメリカのレーガン大統領期の文化的な厳格主義を揶揄することに対して無自覚で、ブルジョワ民主主義と西洋文明を大事に考えつづけているということを、全てワインが表現

しているということは、とても複雑でありながら、官能的だと言えます。

「しかし、なぜあなたはフランスとトルコを比較するのですか？」と、フルブライト学術基金の面談のためにキャンパスにやって来た女性は私に尋ねました。「ワインと食べ物です！」と私は答えましたが、その答えを聞いたときの彼女のショックを受けたような表情を、私はいまだに覚えています。ただ、私は奨学金を得ることができたので、彼女は私の考えに賛成してくれたにちがひありません。そして私は、自分の宣言に忠実でした。ベストセラー『Outliers: The Story of Success』の著者であるMalcolm Gladwell は、いくらか恣意的ではありますが、それなりに真実味のある「10,000時間のルール」というものを提案しています。これは、多くの人は天賦の才を持って生まれてきているのだが、成功に至るためには、その前に、ワーカホリックとなって10,000時間は職業に費やさねばならない、というものです。なるほど。では、「ワイン10,000ボトルのルール」はどうでしょうか。私は1985年から1990年にかけての大学院生時代に、多くのワイン同好会やテイスティンググループに加わっていたので、10,000本近くまでワインを飲んだと確信しています。

それからの年月は、電光石火で過ぎていきました。私は政治経済学者として世界銀行で働き始めていたのですが、論文が1990年にアメリカ社会学会の「最優秀論文賞」を受賞したので、私はアカデミックなライフコースに呼び戻されることになりました。ブラウン大学とジョージア工大で教鞭をとり、スタンフォードで法学の学位を得て、Order of the Coif(全米優等法学生会)の会員に選ばれました。さらに、20世紀で最も寛大な精神の持ち主の一人であるアルバート・ハーシュマンに認められて、私は高等研究所で1年を過ごさせてもらうことすらできました。スタートアップ時期には、シリコン・バレーでも時間を過ごすことができました。

しかし、特にシリコン・バレーで過ごした後に、私はもう二度と学術研究に心を動かされることはないだろうと思いました。ジョージア工大公共政策学部のプロジェクトである「ジョージア運輸局における外部コンサルタント導入による業務能率の向上について」に参加したことは、ラクダのこぶを吸い取ってしまうストローのようなものでした。私はテクノクラートになることには興味がなかったので、同僚たちと同じような利益を共有することはありませんでした。そこで私は、別の選択肢を探さなければならなかったのです。

ワシントンD.C.で世界銀行に勤めていた頃からの友人の一人に、トルコで良い評判を得ている日刊紙「Milliyet」の編集主幹になっている人がいました。彼は、ワインと食べ物についての十分な知識があり、誠実だという評判がある人を探していました。そこで彼は私に、その日刊紙の中で週2回のコラムを書かないかと、私に尋ねてきたのです。それ以来、私はジェットコースターに乗り続けているのです。

私の人気について、理論的な説明が可能なのでしょうか。私は、可能だと思っています。2002年にトルコで正義進歩党(AKP)に政権を与えた力学と、私に人気と名声をもたらした力学は酷似しています。軍部の官僚的エリートの非宗教的な同盟による統治と、大資本ブルジョワジーによる独占状態の解体は、政治と経済状態に対する影響力を失いました。惨憺たる政治腐敗とひどい経済危機に促され、あるいは助けられて、AKP方式

によるイスラム人民主義は、公正で透明な政治を約束しました。AKPは権力ブロックの分裂に乗じて、大資本の独占体制が崩壊する中で、有力な後援者を発見しました。AKPは、アナトリア地方のブルジョワジーや、都市部に住むトレーダー、建築業者、教養のある保守的な若者層、そして大多数の見捨てられた都市部貧困層を動員したのです。

私は、自分の出演している番組が、アナトリア地方や都市部貧困層の人々の間で、どれだけ人気があるのかを目の当たりにして衝撃を受けています。外食する余裕のある、教養のある人々が私の支持者になることは分かります。しかし、周縁部の都市に住む多数の人々や、特に若者の間で、私に対する人気が高いことは、どのようにすれば説明できるのでしょうか。私が「アウトサイダー」であることに助けられてきたことは確かです。私は飲食物産業ネットワークの一員ではありませんでしたし、大きなレストランのオーナーや食品業界と緊密な連携をとることも避けてきました。

しかし、特に若者の間で私に人気があるということを説明するには、もう一つの重要な要因があると思います。AKPが政権を獲得したころから、イスラム文化の中に常に存在する、厳格な抑圧の要素が浮かび上がってくるようになりました。官能的な楽しみに対するこの抑圧的な偏見が、現在のような、敵対者に対する激しい政治的抑圧に結びついたとき、特に若い人々は、豊かな想像力の中に逃げ込むことに向かいます。集団的な形式による抗議活動への不寛容

や、マスメディアへの厳しい検閲は、恐怖を生み出すと同時に、想像力をも刺激するのです。若者は、政治が「汚く」なり、経済生活が「不潔」にまみれることを見抜くのです。彼らは、人生に「成功」するためには、犠牲が必要であるということを良く理解しています。一見、父の世代のことについて注意深くないように見える人や、食べ物とワインのことに熱狂しているように見える人も、われわれの魅力的な分身だといえるでしょう。峻厳な存在と叶えられない志という背景に対して、「味覚」の追求という生涯の冒険は、生命あるものがもっとも満足させなければならぬものでしょう。

おそらく私は、若者にとって、心的エネルギーを増加させ、社会文化的・経済環境的な敵対者によって抑圧されている官能性を解き放つための「ジャイエのブルゴーニュワイン」のようなものなのでしょう。複数の交錯する経済階級に属する若者たちによる、この「ねじれた理想主義」は、「有名人文化」や「アイドル」としての有名人の地位の裏返しだと言えます。そこで、次のマルクスの言葉を思い出す人もいるのではないのでしょうか。「有名人文化の終わりは、有名人の解放によってなされねばならない。」(姫野宏輔訳) ■

> The Violence of Emeralds

エメラルドの暴力

by Johanna Parra, Universidad Icesi, Cali, Colombia
ヨハンナ・パラ (コロンビア:カリ イセシ大学)



No country has more emeralds than Colombia. Warring families have made mining a violent business pursued under the most dangerous conditions. Here a man counts his blessings. Photo by Jan Sochor.

コロンビアでは、さまざまな党派・集団間での暴力が、暴力学という学問領域を通じて社会学的分析の対象となってきた。このコロンビア社会学の一部門は、そもそもの始まりは暴力の時代(1945-65)と呼ばれるある歴史的時期の研究に取り組むものであって、ビショップ・ゲルマン・グズマン・カンポス、オランド・ファルス・ボルダ、エデュアルド・ウマーナによる著書『暴力とコロンビア——社会過程の研究』(1962)によって確立されたものである。「構造的貧困」という概念にもとづくこの仕事は、市民の暴力を引き起こす混乱の社会学説明となっている。1948年4月9日のホルヘ・エリエセル・ガイタンの暗殺という一つの特殊な出来事は、社会・政治的な想像力のなか

にあった恒常的な暴力というものをすべて現実的なものとした。しかし、この「社会的実体」の解体の基本要因は、象徴的な国民国家の統一の欠如にあった。

政治・軍事・宗教的な諸勢力が、人びとに武器をもたせ、党派的な敵対者との戦闘、そして死へと向かわせていった。自由党と保守党とが、コロンビアにおける伝統的・歴史的な政治編成であり、それは国の誕生をもたらした独立闘争(1810-1830)に由来している。暴力は、国の独立から現在に至るまで、国民国家の日常生活に埋め込まれてきた。1863年から1886年までの間、9回の大きな内戦が起こったが、ダニエル・ペカートが『秩序と暴力』のなかで明らかにしているように、これらがある世代から世代へと引き継がれることによって、

党派的な争いの礎となり、20世紀の暴力の根となっているのである。

暴力学は、その研究対象の時間・空間的範囲を大きく広げ、コロンビアの歴史と社会とを理解する社会科学の中心となってきた。事実、取り組むべき課題は多く残されている。つまり、日常生活に埋め込まれた暴力の理解を可能にするような、歴史的記述やエスノグラフィックな仕事を生み出す必要がある。筆者の仕事は、こうした課題に貢献しようとするものである。

「暴力の時代」によって生み出された軍事的衝突だけが、この国に血と戦火をもたらしたのではなく、残忍性の極度な野蛮さが暴力を日常生活の一部としてきた。暴力の時代が終わり、冷戦状態だった1960年代と

>>

1970年代には、いくつもの集団がマルクス主義的ゲリラ行動のために武器をとった。その集団の一つが、自由党の武装党派から派生してきたFARC(コロンビア革命軍)であり、今なお活発に活動している。他方で、保守党軍の再活動化と警護・防衛の私物化とに由来する準軍事的勢力と、麻薬商人によってつくられた武装勢力がある。際限のない武力紛争と軍事的行動と衝突の性質が、組織的な恐怖と残虐性とを流布させながら、膨大な数の難民を生み出してきた。暴力が、それがあまりに深く日常的なかに埋め込まれているために、親密な関係を侵し、家族の間に修復しがたい断絶を生じさせ、世代から世代へと継承される痛苦な沈黙を生み出している。

エメラルド地域における筆者の調査について述べよう。この地域は、東アンデスの孤立した範囲に位置し、およそ8万人の住民が住み、ボヤカ県の地方首都であるチキンキラから約40kmにある。この10年間、この地域は農業経済から鉱業経済への移行を経てきており、希少性の高いエメラルド採掘のために危険を冒して坑道へ潜る少数の住民に莫大な富をもたらしている。地域経済の変容は、農民家族の集団をバラバラにし、新しい密接な関係による結びつきを引き起こしている。エメラルド・ビジネスにおいて最も活動的なファミリ

ーを含む新しい集団は、事業活動と警護・防衛との協働が、ファミリービジネスのなかで一体的に行われることを求めている。アントン・ブロックが『シチリア村のマフィア——暴力的農民起業家の研究(1860-1960)』で詳細に述べているように、これらの企業では、マフィア・ファミリーを農民の伝統へと統合し、家族、敬意、血筋、忠誠といった価値がこうしたエコノミーの運営にとって不可欠のものとなっている。

エメラルドを探し求める暴力的な住民に対して、国家が坑道を管理・守衛することに失敗したために、1970年代には坑道は「ボス」や「ゴッドファザー」や「ドン」といったローカル言語で呼ばれる人びとによって占領された。1960年から1991年にかけて、2度にわたって「エメラルド戦争」があり、ボス達が鉱物の採掘をめぐる互いに争い、その結果少なくとも5千人がこの地域では亡くなった。1991年には、生き延びた「ドン」達が和平協定に合意することで、この戦争は終わったが、エメラルド商人達の間での紛争はなくなり、さらに麻薬密売人とその準軍隊が現れた。この地域に現れた新しい要素は、この地域を支配する家族に対して非合法経済や民兵との接触を強いることとなり、内発的な暴力文化が強化されたのである。

類似した特徴は、コロンビアの他の地域でも見出すことができる。暴力は最も私的な領域、家族関係や子どもの養育へと入り込んでいったが、それらはすべて経済的なブームと国家による規制の欠如の結果である。これらの事柄は、倫理的かつ政治的な失望をもたらしているが、他方で、紛争の類型を明らかにし、国家による何らかの介入の必要性を裏づけていく、社会科学的なフィールドワークの要請をも焦眉のものとしているのだ。(岩館豊記) ■

> Land Restitution in Colombia

コロンビアにおける土地返還問題

by Nadia Margarita Rodríguez, University of Rosario, Bogotá, Colombia
ナディア・マルゲリータ・ロドリゲス(コロンビア:ボゴタ ロサリオ大学)



More than 4 million Colombian peasants, such as this old man, have been forced to abandon their lands in the last fifteen years.
Photo by Julián Vasques.

コロンビアにおける土地返還をめぐる論議は、2011年6月10日、犠牲者法としても知られる法律第1448号の可決から始まった。土地返還によって提起される膨大な政治的、経済的、社会的、法的課題を考慮すれば、また武力衝突に関する国家の明確な承認を考慮すれば、それは歴史的に重大な出来事であった。とくにその第3章は、農民たちへの土地返還を制定している。農民たちは、この20年間のうちに、現在継続中の武力衝突の一部によって土地を奪われた。その抗争は50年もの間、コロン

ビアに影響を及ぼしてきている。この第3章は、論議を呼んでいる。というのも、政府がそれを強固に支持しているからである。このことは、本問題を無視してきた50年間を埋め合わせしようとする政府の目論見として解釈されうる。あらゆる努力が尽くされてきたが、その法律を発効させるにはいくつもの障害があった。

コロンビアにおける土地返還問題は、土地所有権が極度に集中しているという観点から理解されなければならない問題であり、農村地域の開発によって直面することとなった主要問題の一つである。このことが経済

>>

的、政治的、社会的な根深い不平等の基底であるだけでなく、コロンビアにおける血なまぐさい抗争の主な原因の一つでもある、と多くの解説者が論じている (Fajardo 2002, Machado 2009, PNUD 2011)。土地の集中は、生産力を有する土地の大半を、ごく少数派の経済的および政治的エリートが所有しているという、農業の二極構造を引き起こしている(1)。これは、植民地時代から支配的な構造であり、時を経てかえって悪化している。前世紀を通じた農業改革、とりわけ1936年と1961年の改革が失敗してから (Molina, 2000: 36)、土地返還を要求する武装集団が1960年代に現われた。その結果、コロンビアの農村の大部分は半永久的危機の状態にあり、そこでは合法的な人びとと違法的な人びとがその領土に対する支配権をめぐる闘争してきた。その闘争は、400万人もの農民たちを、組織的に、暴力的に、そして広範囲に亘って強制退去させることへとつながった。このように、土地返還という任務において組織が直面している課題は、莫大なものなのである。

状況は複雑である。その理由は、法的制限と、土地返還が生じる社会状況による。ロサリオ大学社会開発研究センターは、その法律を発行させるという課題について分析するために(法学と社会科学とが共同で行なう)学際的な研究を行なっている。このプロジェクトの一部は「法的返還部門」(the Unit of Legal Restitutions) (2)のための調査研究を引き受けており、それは複雑に絡み合う次の5つの問題を中心に進められている。

第一に、武力衝突は土地返還が予定されている地帯で続いており、そのことによって国家は、農民がその土地を二度と奪われないと保証するのが難しくなっている。コロンビア国家の課題は、武力衝突を終わらせることによって、農民たちの安全を確保することである。

第二に、法律によると、返還は私たちの正当な権利あるいは賠償として定義されているが、土地あるいは諸個人にもたらされたいかなる被害も埋め合わせるものではないし、また「以前の状態」に戻すものでもない。したがってこの政策は、土地をめぐる権

利を返還することに関してはもちろん制限されえないが、犠牲者たちがこうした土地で威厳を持って生きることが可能にしなければならないのである。さらに、強制退去は幾多の人権侵害と関わってきており、根深いトラウマを負った犠牲者たちをなおざりにし、その結果、かれらがその土地に戻ることをより困難にしている。すなわち、犠牲者たちは法的領域を超えた支援を必要としているのである。

第三に、自分たちの土地を奪われ、現在、都市部やその近郊に居住する農民たちは、農村地域に戻りたいと思いがちである。開発、教育、健康において極度に不平等が生じていることを考慮に入れば、なおさらそうである。土地強奪は社会的な骨組をバラバラにした。こうしたコミュニティが自ら再生するのは困難であろう。

第四に、土地所有者たちが自分たちの土地で生計を立てて生きるには、経済的、技術的、生産的支援が必要であろう。そして、土地所有者たちがその土地を、現在そこで主に農業と連携したビジネスを行なっている企業に、貸したり売ったりしないようにさせるべきであろう。

第五に、対処すべきいくつかの法的小および組織的な課題がある。たとえば、返還を実行に移すための公務員の教育や、土地の利用や所有権に関する知識を備えた裁判官の教育(コロンビアには存在しない)などである。国家は、実際のところ不法使用が生じていたという事実を明らかにしなければならないであろう。そして、このことは次の重大な問いを引き起こす。国家は、返還を予定しているその土地を——そのほとんどが現在、他の者たちの所有下にあり、法律は買い手たちを野放しにしているというのに——どのようにして手に入れるのかという問題である。

最後に、もっと大きな構造的で政治的な問題がある。すなわち、領土の支配権をめぐる、国家エリートと地域エリートとの間の対立である。これは、その地に眠っている自然資源開発についての経済的利害の衝突に関わっている。クルバラド(Curbaradó)、ヒグアミンド(Jiguamindó)、アシエンダ・ラス・パバス(Hacienda Las Pavas)

のような、土地返還の象徴的なケースは、たとえば法的な課題が解決されたとしても、ローカルなレベルでの権力形態によって土地返還の実行が妨げられる、ということを示している。(堀田裕子訳) ■

¹ 土地のジニ係数は、農地が集中している度合いを測定する。その数値が1に近ければ近いほど、集中状態が高いことを示している。コロンビアの係数は0.87であり、世界でも最も高い部類に入る。

² これは、土地返還を実行するために法律として制定された制度である。それはかつて「土地と土地を奪われた人びとの保護プログラム」(the Program for the Protection of Land and Dispossessed People: PPTP)として存在したが、形態と目標がこれとは異なっており、かつこの部署が今日備えている政治的あるいは法的支援を一切行っていないであった。

References

- Fajardo, D. (2002) Para sembrar la paz hay que aflojar la tierra. Bogotá: Universidad Nacional de Colombia.
Machado, A. (2009) La reforma rural, una deuda social y política. Bogotá: Universidad Nacional de Colombia, CID.
Molina, P. (2000) "Reforma agraria? No es tan claro para qué el país la necesita." *Economía Colombiana* 278: 34-7.
PNUD (2011) Colombia Rural: Razones para la esperanza. Informe de desarrollo humano 2011. Bogotá: INDH PNUD.

> The Student Movement in Chile

チリの学生運動

by Milton L. Vidal, Academic University of Christian Humanism, Santiago, Chile
Milton L. Vidal (チリ: サンティアゴ Academic University of Christian Humanism)



The Chilean Student Movement against Neoliberalism: "Our Future is not for Sale."

チリは極南に位置する小さな国であり、多くの世界地図では南アメリカの先端に見つけることができる。国際ニュースのヘッドラインにときどき現れる場所でもある。そして2011年に大学生や高校生によって行われた社会運動が、国際舞台において、より顕著な社会的抗議になった。

チリは世界のなかでも最も不平等な地域の一部である。人口の3分の1が

貧困であり、新しい形、古い形、それぞれの形態の暴力、虐待、汚職、乏しい資源の浪費といったものに苦しんでいる。こうした現状において人々は、男女ともに、自分自身の夢を求めて戦うため、基本的な権利を要求するため、共通の利益を支持する決定の履行や約束の実行を政府に対して求めるために、様々な方法によって組織化を進める。もちろんこれがチリの現実である。高校生や大学生の社会的権利に比べ、ラテンアメリカの人々を、ストリートへ駆り立てるような不満の源があきらかに数多く存在する。だがこの南の国は、1970年の中頃から、特に大学教育に関係との関係で、ラテンアメリカの政

府によって施行されたネオリベリズム政策に出発点があり、またそれに刺激を受けているということをおぼろげに忘れない。

なぜ抗議がチリで始まったのか。なぜ彼らは自身の国で起きている多くの抗議を正当なことだと思わないのか。この理由は、ネオリベラルな保証が破綻してきたことにあるといえる。実際、大学教育をすべての人に受けさせるという保証が不可能になってきている。大学への入学者の増加は、学生や親が借金をすることで可能になっていたものだった。チリの大学の学費は世界の中で最も高い部類に入り、多くの人

>>

は借金して学費を払っている。社会学の用語で言うなら、チリにおける所得の分配はかなり不均衡であるということになる。そして特に重要なのは、私たちの方がより高価な教育を社会的に望ましいものだと考え、またそれが社会移動の決定的要因だと考えていることである。

家庭における高い教育への投資とラテンアメリカにおける最高額な学費の見返りはまだ高まっている。この増加の限界は家庭の購買力によって規定される。つまり、比較的多くの収入を得ている家庭に生まれれば良質の中等教育が受けられ、また高等教育の恩恵をうけることができる。他方で、少ない資源しかなく並の教育しか受けていない人々は、怪しげな機関に通って高いコストを払い、かなりの犠牲を払わなければならない。このように、良質な教育を求める抗議は、社会的不平等に向けられたものであることを示している。

学生によって始められ、週を追うごとに強まった公教育擁護の社会運動には、驚くべき多くのものがある。要求の内容、動員し正当化される社会的な動力、強まる国際的な団結力などはチリに限られるものではない。それどころか、ウルグアイ、ボリビア、ブラジル、プエルトリコ、エクアドル、コロンビアなどでも、公教育擁護の社会運動は成功している。しかし、チリの事例のもつ特性のいくつかを指摘することは、国際的な議論や考察にとって有益であらう。

第一に、大学は依然として社会生活の指標である。この歴史的に不変だという主張を行うことは、素朴なことだが忘れられやすい。政治家は、大学のありかたを変える必要があるが、高等教育の問題を周辺的なものだと考えているので、その改革を遅らせている。一方で経済を主導する人々は、高等教育の欠陥は、公共セクター、銀行、家庭、あるいは上記の全体からの資源投入で解決できると考えている。これは大きな間違いである。大学は既にかかなりの程度、政治的な部門になっている。社会の多くの主要な変化はなにかしら大学と関連している。ユダヤ人のバビロン捕囚とそこからの脱出、プラトンのアカデミーの政治的な議論、ルターによる宗教改革やドイツ語への聖書の

翻訳、ジュネーブ大学のカルヴァン主義、ホメイニ以前と以後のイラク、人民共和国以前の中国、文化大革命や天安門事件、メキシコのトラテロルコでの大虐殺の以前と以後、こういったものを考えると、大学は現在、主要な政治的・社会的な重要性をもったグローバルな機関であるし、今後もそうあり続けるだろう。このように大学は、常に社会学の興味をひきつける主要な対象であり続けるにちがいない。

二つ目に、すべてのレベルの教育、特に大学レベルでは、国家と市場の間のどちらかの極に従属することはできない。国家の介入が教育の妨げになるというかつてのフンボルトの主張は正しかった。ラテンアメリカの人々は、国家が官僚制の中で体现される権力を常に具現化していることを知っている。教育社会学者は、多くのやっかいな改革を自らが実行していることを知っている。しかしフンボルトでさえもが国家なしには完全にやることはできないと主張していた。我々は国家が教育制度のあり方を保証するように求める必要がある。また我々は、大学が個人の利害を争う場所になっていくことを防がなければならない。この意味で、教育や大学は個人の投資によるものとしても、教育は公共財であり、大学は公的機関である。大学の教育、研究、アウトリーチ機能は本質的に公的なものである。学位を与えるその能力は、社会の信頼にもとづいている。

三つ目に、チリでの学生運動は、そしてより一般的にラテンアメリカの学生運動は、教育の商品化を否定する。市場経済における組織論理と科学教育の組織論理とは両立しない。学生と教授の密接な共同作業から見て取れるように、教育は常に集団の努力によるものである。それは、購入することができないので、商品化することもできない。学生は、自分たちの科学的な活動への積極的な参加を通してのみ教育されうようになる。このことが、我々が学生たちをセミナーでの議論に巻き込み、レポートを執筆し、研究チームに参加し、他の学生と自分の考えとを共有したり論じたりすることを動機づける理由である。教授と学生とが売り手と買い手の関係にあるという発想は、単にミスリーディングな(しかもこれは、よりイデオロギー的な理由からも批判される必要がある)だけではない

く、教育の目的の達成にとっては障害でもある。私は、大学で学生を顧客や患者のように考える同僚をみることもあるが、ひどい話である。

学生には学問の自由を求めており、教授もまたそうである。だが、学問の自由は市場経済に侵食されている。もし教授がサービスを提供する従業員や、高等教育機関のオーナーに依存している者と考えた場合、彼らは自身の狭小な利益の獲得のために学生を利用することになるだろう。

最後に、私たちは学生の抗議が、社会にとって、また大学にとって、そして社会学者にとって、喜ばしいニュースであるといわなければならない。大学は、社会それ自体が研究テーマとなり、その過程で社会自身を自覚する場である。そこでは常に利害や権力の闘争が、学問の自由への脅迫という自覚のなかで存在してきた。しかし、それらの闘争は大学を破壊できたわけではない。我々はこのようにチリの学生運動を見るべきであり、ラテンアメリカであるチリを越えて、世界での社会運動も考える必要がある。私は社会運動の持続は民主主義社会に利益をもたらすと考える。社会と大学は学生運動を介して再び強く結びついている。そして社会学に対して刺激的な文脈を与えている。社会学的な語りが増少してきているという者は間違っている。社会学は南半球の健康を担うものであり、私は以上のニュースが苦しんでいる人びとを励ますものになることを望んでいる。(小川翔平訳) ■

チリは経済協力開発機構OECDに参加している国である。この組織によれば、チリはジニ係数が0.5であり、参加国中で最高度の不平等さを示している(Society at a Glance, Social Indicators, OECD, 2011)。これをより詳しく描くと、チリの裕福な上位10%の平均所得者はノルウェーの人よりも高いが、他方で、最貧困層の10%の平均所得は、コートジボワールの人の平均所得と同程度である。多くのチリ人(60%)は、平均して、アンゴラの人よりも所得が低いのである。

> Executive Committee Meeting in Beirut,

March 19-23, 2012

ベイルートでの理事会報告(2012年3月19-23日開催)

by Michael Burawoy, University of California, Berkeley, and ISA President
Michael Burawoy (ISA会長、カリフォルニア大学バークレー校)



Members of the ISA Executive Committee mix sociology with Lebanese delicacies. Photo by Markus Schulz.

ISAの理事会の年次会合で、ISAの理事会が5日間、ベイルート・アメリカン大学で開催された。それは、Sari Hanafi教授と社会学・人類学・メディア研究学部の彼の同僚の方々による歓待のなかで行われた。大会の2日間は、ベイルート・アメリカン大学、レバノン社会学会、そしてフリードリヒ・エーベルト財団の共催で、「アラブの春」(このことについては既刊のグローバル・ダイアログで言及されている)についての素晴らしい

国際シンポジウムが開かれ、他との比較の観点をもつ、アラブ世界全体から講演者を募った。

5日間の理事会は、それぞれ以下のような委員会に分かれて始まった。世界社会学会議2014横浜大会のプログラム委員会(司会VP Raquel Sosa)、出版委員会(司会VP Jennifer Platt)、財源と会員に関する委員会(司会VP Robert Van Krieken)、研究調整委員会(司会VP Margaret

Abraham)、国家間連携委員会(司会VP Tina Uys)。

理事会は5日間のうち週末の2日間開催された。私は世界中の様々な所を数多く旅したことや、1年間のISAのオンラインに関する進捗状況を報告した(「編集部より」参照)。我々の喫緊の課題のひとつは、2018年ISA世界会議をどこで開催するかを決定することであった。素晴らしい場所であるブダペスト、コペンハーゲン、メル

>>

ボロン、サラゴサ、そしてトロントの5か所が手をあげた。最終候補として2ヶ所(トロントとサラゴサ)に絞ったが、トロントを訪問後に最終決定をするだろう。また我々は、国際科学評議会(ICSU)の会員になることを決定した。小委員会のレポートに基づいて、我々は、社会学の調査や実践を鑑みて、ISA賞をつくる可能性や国際賞の詳細を考えることを決めた。以下は、個々の委員からの報告である。

> Margaret Abraham
(研究部門副代表)

研究調整委員会(Research Coordinating Committee)はペイルートで非常に生産的な会合を持った。我々は、以下の議題について議論した。それらは、Research Committees, Thematic and Working Groupsの規則改訂の意義について、2006年から2010年のRC-TG-WGのすべての活動について、そして2012年8月ブエノスアイレスでの第2回ISA社会学フォーラムについてである。

会合の重要な点は、そのフォーラムのために進行中の準備について話し合うことであった。我々は、計693セッション(うち51がスペイン語)に対して7,928人から6,019本の要旨を受け取った。ラテンアメリカからの説得力のある表現(3,028本あるいは45%)を含む世界各国からの論稿を受理した。

我々は多くの参加者を期待しているが、困難な経済状況のため予定していた参加人数は下回るだろう。私は、フォーラムのテーマ社会正義と民主化一に関連のある問題について知識や調査を広め交換するための公開のヴァーチャル空間を作成するために、Sageとともに動いている。このことに関するより多くの情報は、すぐに公開される予定である。

RC/TG/WGの規則改訂に関するレポートと議論によると、いくつかのRC-WG-TGは、さらにそれらの規則を改訂する必要がある。これらの改訂は、次の選挙までにしっかり完成させる必要がある。われわれはまた、それらの組織形態を再検討するためにRC-WG-TG委員会の必要性を議論する必要があり、特に任務に従事する

時間の長さについて議論する必要がある。多くの委員会は、次の選挙で任務に従事してくれる新たなメンバーを探すために積極的な手段をとる必要がある。

研究調整委員会(RCC)は、多くの申請を再検討した。2011年には16,900USドルが18のRC-WG-TGに割当てられ、2012年には8,660ユーロが13のRC-WG-TGに割当てられた。出版部門副代表Jennifer Plattは、現在オンラインで利用できるResearch Committee journalsのためのガイドラインを作成した(http://www.isa-sociology.org/about/rc_aims.htm)

最後に、2006年から2008年、2008年から2010年にRC-TG-WGによって提出された活動報告書が再検討され議論された。大半のRC-WG-TGは活動的で、会議を開催したり、ニュースレターを出版したり、他の専門的な活動に着手したりしていた。改訂されたRC-TG-WGの活動形態は、RC-WG-TGを横断したより効率的で安定した様式でデータを獲得するためにデザインされている。

> Jennifer Platt
(出版部門副代表)

ハードカバーの論文集は今もなお西洋の図書館では西洋の価格で販売されているが、インドで本を生産しISAのメンバーや途上国の購入者にはインド価格で販売することについて、Sage Studies in International Sociologyの編集長Sujata PatelとSage出版社は一致している。これは、とても好意的に受け入れられた。

使用許可料金を支払うことなく、Current Sociology (CS)やInternational Sociologyから特に関連のあるあらゆる論文を(各国社会学会の援助のもとでなされる)翻訳・再刊の機会を各国社会学会に与えることが承認された。CSは毎年追加事項を発表しており、それはソシオペディアから引用されたレビュー論文から構成されている。

雑誌の編集長と副代表は、ISAのすべてのイベントで何らかの出版に関連する活動を行うべきであるという方針が採用された。すなわち、「編集長

に会う」セッション、雑誌論文を書くワークショップ、あるいは地区の編集長との会合などである。彼らはまた、我々の雑誌を宣伝したり、新たな進展をみたり、そして新たな著者、審査員、本の書評者を募るために毎年主要な会議に参加することになるだろう。

> Raquel Sosa,
(プログラム部門副代表)

ペイルートで行われた世界社会学会議2014横浜大会のプログラム委員会の会合が、非常に成功裏に終わったということを皆さんに報告することができることは喜ばしいことである。横浜大会のテーマは、Facing an Unequal World: Challenges for Sociology。我々はすでに、論文やセッション主催者の応募期限を2013年1月15日に設定している。これは、ISAのウェブサイトを確認することができる(<http://www.isa-sociology.org/congress2014/>)。ad hoc セッションや integrativeセッション、および著者を交えた書評セッションの申請を期待している。会員はこの機会を、現代の社会問題について国家間を超えたディベートに参加する特別なものであると考えてほしい。多くのISAのメンバーが彼らの研究時間の大半を、貧困、不平等、そして不公平に関連する問題に使うことで、我々は世界社会学会議2014横浜大会が知識と社会的実践の双方に十分貢献するだろうと期待している。

プログラム委員会は、以下のトピックに関する10のsemi-plenaryセッションを準備することで合意した。それらは、構造的不平等の形態、不平等と権力の構造、生産と不平等の実践、不平等の社会的不正、様々な歴史的そして文化的伝統からみる正義の概念、正義と社会システム、不平等の打破、行為者と経験、環境正義と持続可能な未来、社会学と不平等である。参加者は様々な伝統を持っており、世界各国から訪れるだろう。ISA執行部やLocal Organizing Committeeとともに、これらのsemi-plenaryセッションが我々の仲間の興味を引き、21世紀のための世界の社会科学の革新に貢献することを期待している。

> Tina Uys
(各国全国社会学会部門副代表)

我々は、ISAの正会員団体の基準を話し合い、明確にした。ISAの正式な手続きによると、正会員団体は各国全国学会連携委員会(the National Associations Liaison Committee)と、財源と会員に関する委員会の推薦による理事会の決定によって選ばれる。正会員団体の規則は、ISAの規則の条約1と条約2に合致していなければならない:

- 正会員団体は彼らの、学派、科学的アプローチ、あるいはイデオロギー的な見解にもかかわらず、社会学者として科学的な目的のための非営利の集まりでなければならない。
- 正会員団体の目的は、社会的な知識の発展でなければならない。それらの組織は、社会学者の目標を理解し、会議を主催したり出版を促進したりするような様々な活動を通して、社会学の自由な発展をサポートし強化する努力をすべきである。
- 正会員団体の理事は、定期的に民主的なプロセスを経て選出されなければならない。

我々は、毎年のEC会合期間外に受け取る正会員団体申請を判断するためにつくられた新たなプロセスを承認した。スロベニアの社会科学協会は、2011年の下半期に正会員団体申請を行った。この申請は、オンラインプロセスで評価され承認された。ウガンダ社会学・人類学協会による申請は、EC会合で承認された。ISAは現在60の正会員団体で構成されているが、正会員団体の全てが会費を納めているわけではなく、それゆえ残念ながら良好な運営状態ではない。

2011年メキシコで行われた各国全国学会連携委員会の会合で作られた基準にもとづき、地域のワークショップの助成金は、バングラデシュ、ブルガリア、モザンビーク、そしてフィリピンの社会学協会に授与された。バングラデシュとモザンビークはウェブサイト発展のための助成金も受け取った。

各国全国学会評議会(the Council

of National Associations :CAN)会議のための計画が形作られてきたが、この会議は2013年5月にトルコのアンカラで開催される。会議のテーマは、「混迷期の社会学:比較アプローチ」である。会議は、中東工科大学社会学部、トルコ社会科学協会、そしてトルコ社会学会の共催で開催される予定だ。

> Robert Van Krieken (財源と会員部門副代表)

財源と会員に関する委員会は、現在約5,000人いる個人会員を着実に増加させていると報告した。生涯会費は現在300ユーロとなっているが、委員会は国家のカテゴリーによって会費を区別することを提案している。カテゴリーAは300ユーロ、カテゴリーBは200ユーロ、カテゴリーCは100ユーロで、世界社会学会議2014横浜大会でのみ変更可能である。我々は、会員がウェブサイト経由でISAに寄付したり、寄付や遺贈を得る方法を検討することも提案した。

我々は会員の役に立つように、追加財源要求の議論に関連する2010年から2014年の運営費の詳細を記したレポートだけでなく、2010年と2011年の要約版財務諸表も提供した。全体的な我々の財務状況は、健全な状態である。我々はISAの活動を拡大するために、スタッフ数や一般管理費を十分増やすことができている。ただ、2011年のSageとの新契約による助成が増大したことで、我々の財務状況は相殺されている。さらに追加財源が、Global Dialogue, Journeys through Sociology、そして編集長の旅費のために承認された。

> 他の事項

我々は、世界社会学会議2014横浜大会のためのLOC(地域組織委員会)会長の長谷川公一から激励の報告を受けた。また我々は、国連 (Jan Fritz, Rudolf Richter, Rosemary Barberet, and Hilde Jakobsen)、法社会学国際機関(the International Institute for the Sociology of Law)(Ramon Flecha)、そしてthe Global Development Network (Emma Porio)への代表から提出されたレポートについて議論

した。我々はまた、2012年のタイの博士課程の学生のための図書館の進捗状況についてChin-Chun Yiから話を聞いた。我々は、EUの社会科学研究の重要性を支持する理事会からの手紙を集約して書き、署名した。

ベイルートでの会合を非常に有意義なものにするためにあらゆる手段を尽くしてくれた主催者、特にベイルート・アメリカン大学のSari Hanafi、Oubada Kassar、そしてChebib Diab、最後に我々の込み入った会合を手順よくまとめ、ISAが将来発展するように見守ってくれているISA事務局の辛抱強いスタッフに感謝の意を表し、この理事会を終えた。(小坂有資訳) ■

> Exploring South Africa while Discussing your Dissertation

互いの論文について議論しながら南アフリカを探検する

by Tina Uys, University of Johannesburg, South Africa, and ISA Vice-President for National Associations, 2010-2014

ティナ・ユーイズ(南アフリカ:ヨハネスブルグ大学、2010-2014年ISA南アフリカ協会副会長)



| Students from the ISA PhD Laboratory touring Soweto.

第10回ISA博士課程学生研究会(Doctoral Laboratory)は、ヨハネスブルグ大学の千里離れた島で行われた。その島はフェリーニヒングの街に近いバル・ダム湖の上であり、日時は2011年11月8日から11日にかけてのことである。50人の応募者から選ばれた12人の参加学生は、中国、イラン、欧州、米国、メキシコ、そしてブラジルという幅広い国々から集うこととなった。また、南アフリカからも2人の学生が参加している。指導者も同じく多様な国々から集っている。すなわち米国のジャン・マリー・フリッツ、台湾のチン・チャン・ユ、日本の佐藤嘉倫である。今年のテーマは社会的排除、シティズンシップ、そして社会関係資本となっていた。

研究会は「ようこそ学生諸君、アフリカに戻ろう」というイベントから始まった。すなわち、人類発祥の地(Cradle

of Humankind)という愛称で知られる世界遺産の一部をなす、スタークフォンテン洞窟を訪れる企画である。この地から、400万年以上前の人類の誕生に至る、ヒト科をはじめとする動物たちの化石が多数発掘された。これら化石のうち最も重要で最も有名なものが「ミセス・プレス」と呼ばれる210万年前のアウストラロピテクスの頭骨であり、また「リトル・フット」と呼ばれる300万年以上前に遡る、同じくアウストラロピテクスのほぼ完全な全身骨格化石である。この訪問の後、一行はマイクロバスとボートを乗り継いで会場の島に向かった。

博士課程学生研究会は、4日間にわたる昼間に、学生たちとスタッフ陣が互いに自らの研究について発表するセッションを行った。多様な文化的背景を有する聴衆による活発な討論によって、効果的な議論が可能となった。そして夕刻には、暖かな夏の空気の中でゲーム・ドライブと島を巡るボート遊びを楽しんだものである。これらは全員がお互いをより知るための良い機会となった。島での活動の最終日は、伝統的な南アフリカ風のbraaiというバーベキューとキャンプファイアによって閉められた。翌日の土曜日には、近年の南アフリカの歴史を知るべく、学生およびスタッフともヨハネスブルグ市ソウェト地区に向かった。ここでは典型的な潜り酒場(shebeen)式の昼食を楽しんだ。そして夕暮れにお別れ夕食会を催すことで、全日程を終えた。場所は、ヨハネスブルグ市にあるメルビルコピース自然保護区にある、眺望が素晴らしいザ・ビュー・ホテルであった。

最後に人文学部長のローリー・ライアン教授に感謝を申し上げたい。彼は研究会での歓待に要した費用の大半を提供してくれた。博士課程学生研究会の参加者各位が、あの島とヨハネスブルグでの思い出を気に入ってくれることを、私は確信している。(井出知之訳) ■

> Journeys through Sociology

社会学を介した旅路

by Laleh Behbehanian, University of California, Berkeley, USA
Laleh Behbehanian (米国:カリフォルニア大学バークレー校)

Laleh Behbehanianは“社会学を介した旅路”というプログラムを催した。そこでグローバルダイアログは、彼女がISA理事会へのインタビューから学んだことをどのように判断しているのかうかがった。

Journeys through Sociology (『社会学を介した旅路』)は、ISA理事会理事会メンバーとの一連のインタビュー記録である。世界各地にいる理事メンバーへのインタビューは、スカイプを使って実施された。インタビューから、理事メンバーである研究者たちの個人的な社会学を介した旅路を、垣間見ることができる。インタビューの中心となるのは、二つの質問である。それらの質問とは、かれらがどのように社会学に引き寄せられるに至ったのか、そしてかれらが直面してきた課題とはなにかである。インタビュー全文は、ISA理事会のウェブサイトで閲覧することができる。(http://www.isa-sociology.org/journeys-through-sociology/)

インタビューには魅力的な個人的話題が詰まっているが、他方、インタビューを通して見れば、空間と時を越えた社会学者共通の経験もよく表れている。最も根本的なことは、社会的世界についてもっと知りたいという深い好奇心の感覚を、かれらが持ち合わせているところである。

佐藤嘉倫は、“社会のパズル”を解き明かすための一つの方法として、社会学に引きつけられたと語ってい

る。他方、Jennifer Plattは、種類の異なる経験的データに取り組む興奮について記している。これらの研究者の多くにとって、旅や移動の経験をすることによって、社会学的好奇心が高められている。

Michael Burawoyの社会的想像力は、アメリカ合衆国、インド、そしてザンビア共和国への旅のなかで育まれている。一方、Habibul Khondkerは、バングラディッシュからカナダ、シンガポール、そしてアラブ首長国連邦への移動経験を経て、“流浪する社会学者”としての自分自身のものの見方を形づくり、比較社会学にかかわるようになった。

Tom Dwyerは、“異邦性”という若かりし頃の経験を説明している。この経験は、ニュージーランドに暮らすアイルランド系移民の家庭のなかで培われたと同時に、若い時に移動を重ねたため、こうした異邦性が世界について社会的に思考する方向へと彼を駆り立てたのだった。

Vineeta Sinhaは、彼女の社会学の教授たちに教え込まれた“苦悩の感覚”、そしていかにこれが(この概念が)世界を新たに解釈するワクワクするような可能性に開かれている

かを話し、Tomと似たようなテーマについて論じている。

これらの研究者たちの多くが、当初、学生のやる気を引きだそうとする教師たちによって、この学問領域に引き寄せられたのも驚くことではない。教師たちは、自分の受け持つ学生に、インスピレーションを手渡そうとしていたのである。

Tina Uysは、自分を受け持っていた教師から受けた感銘と、南アフリカの学生たちが現に直面している課題を理解し表現するために社会学をいかに利用しているかを詳細に話している。

Simon Mapadimengも、南アフリカ出身の人である。彼をこの学問に導いたのは、教授たちであった。このことは、反アパルトヘイト闘争への深い関わりと、黒人による南アフリカの社会学を担う新しい世代を育もうとする彼の献身に深く関わっている。

しかし、1つの主題がインタビューの中に表れていた。それは、社会変革の手段としての社会学実践という主題である。事実、全てのインタビューの話題が、社会学の潜在的な力に言

>>

及している。その力とは、逼迫した社会的、政治的、そして経済的問題を処理する能力である。

Jaime Jiménezは、大学生だった1958年にメキシコ初のコンピューターを制作した。彼は、コンピューターが国民の抱えている問題を解く可能性を秘めていると感じ、社会経済的問題に密接に関わる計量的調査研究の実践へと進んだと語っている。

Dilek Cindogluは、1970年代後半のトルコの政情不安が、自分を社会学に駆り立てたと話す。「私はトルコで一体何が起きているのか知りたかったのです。そして、今もそう思っています!」

多くのインタビューからわかるのは、その人の来歴と歴史という魅力的な話との相互作用によって、研究者たちが社会学の道を歩いてきたということである。Ishwar Modiはインド独立後の時期、社会科学者たちが(インドの)再構築と発展に注視していた様子を話している。Chin-Chun Yiが社会学に導かれたきっかけは、1970年代の台湾で起こった激動の社会変容であった。他方、Emma Porioの社会学を通じた旅路は、厳戒令の中、フィリピン社会を覆っているめまぐるしい社会の変化を理解したいという強い願いから始まった。Elena Zdravomyslovaは、ソビエト社会学を設立した父親と父親の同僚による影響を受けたこと、1970年代後半、その学問領域に幻滅した後、パレストイカによって社会学がどのように返り咲いたか、とても魅力的に話している。

インタビューは、世界中の社会学者が直面している課題の幅広さも示している。ジェンダー、人種、国籍などによって生じている難題に挑戦する人もいれば、より共通性のある問題に取り組んでいる人もいる。南半球の多くの研究者たちが、社会学的理論を伝統的なヨーロッパ中心主義的範囲を越えて展開すべきであること、そしていまだ続く地球規模の不平等を、社会学的知見の産出(ジ

ャーナル、出版物、研究者としての特権など)を通して明示していく必要性を強く訴えている。これらの研究者たちの多くは、地域社会で着想を得て、世界とも密接な関係にある研究を実践しようという挑戦に取り組んでいる。Sari Hanafiは、出版における緊張関係を雄弁に捉えている。つまり、「世界に向けて発表しているが、地域社会では無名である」、もしくは「地域社会で発表しているが、世界的には無名である」のかという選択についてである。

“fascinating accounts of the intersection of biography and history”

その人の来歴と歴史という魅力的な話との相互作用によって、研究者たちが社会学の道を歩いてきたということである。

インタビューを通して、より一層共通して表れてきた課題が多くある。その1つに、学問領域の境界による制限がある。Raquel Sosaは、領域横断的な研究の発展とラテンアメリカ諸国内での協働を懸命に促しており、「社会的現実に対する異なる解釈を探し求める」重要性を説明している。Robert van Kriekenは、領域を横断する思考を奨励するには、社会学は主要な役割を果たせると主張し、常日頃から彼がそのフィールドにいかに関心を持っているかを説明している。なぜならば、そうした方法によって彼は別種の知識に狙いを付けることができ、さらにはそうした知識にかかわることができるからだという。

社会学者の多様な役割(教育、研究、組織運営、活動など)のなかでバランスを取ることで、様々な社会学的研究者(専門家、批評家、政治家、公共団体)との交渉も、インタビューの

焦点となっている。Margaret Abrahamは、彼女自身の研究、教育、アメリカ合衆国における南アフリカコミュニティ内部のDV対策の活動の相互作用を語っており、バランスをとる行為をよく反映している。これらのインタビューは、色々な世代、様々な世界の地域に訴える多様な社会学の魅力をよく示している。インタビューはまさに、ISAのリーダーたちがいかに興味深く楽しい人びとなのかを表している。もし、私のいうことを疑うのならば、各インタビューの最後を見ていただきたい。そこには解答してくれた人たちが、もし社会学者でなければ何をしていただかが書いてある。弁護士、医者、ジャーナリスト、建築家に加えて、ベリーダンサー、バレリーナ、バー経営者、大工、そして「stirring up(よくかき混ぜよ)」という料理ショーの主催者というのものもある。

このように多様性があり心優しいグループが私たちの組織に奉仕しているのだから、私たちはとても恵まれているのである。(三部倫子訳) ■

> The Arab Uprisings

Sociological Perspectives and Geographical Comparisons

アラブにおける蜂起—社会学的観点と地理的比較から—

by Amina Arabi and Julian Jürgenmeyer, Friedrich-Ebert-Stiftung, Lebanon

アミナ・アラビ & ジュリアン・ユルゲンミーヤー (レバノン: フリードリヒ・エーベルト財団)



Revolutionary Art in Mohamed Mahmoud Street, Cairo. Photo by Mona Abaza.

アラブ世界で起きた大衆蜂起の運命はいまだ定かではない。だが、当地域の政治的光景は植民地主義の形式上の終焉以来みられなかったほどまでに様変わりしてきたのはどうに明らかである。ゆえに、「アラブ例外主義」という根深い本質主義的な考えは、最終的には反証されているのである。(2012年)3月20日と21日にバイルートのアメリカン大学で開催された大会は、これらの蜂起と革命に関する広範で多数の主題を論

議するため、アラブ世界一帯のみならずインド、南米、北米やヨーロッパやアフリカからも研究者を集めた。同大会は、特に看過されがちな社会学的側面を前面に扱い、歴史・国家間・大陸間の比較を通じて蜂起が今後歩む道のシナリオを考察することを狙とした。

Markas Schulz (イリノイ州立大学アーバナ・シャンペーン校) は社会運動論の枠組みを発展させて、「ウォール街を占領せよ」運動に関する報告においてこうした比較の視座を可能

なものとした。アラブの事例においては、Mohammed Bamyeh (ピッツバーグ大学) が無政府主義的価値体系という長らく続く伝統について振り返って考察し、アラブの春とウォール街占領運動には対話のありかたや指導者不在の特質など、驚くべき類似点があることが多数明らかになった。Bamyeh 報告は、アラブ世界一帯における大衆運動が権威主義に対して非常に懐疑的だった歴史的記憶の表われであり、国民が単なる代表者としてではなく実際の支配者として設定された後に生じた闘いだと考えられ

>>

る、とした。

民主主義を切に希求することが蜂起において果たす役割は、繰り返し議論の主題となった。参加者は、経済的不満がもつ大きな重要性に同意する一方で、純粋な唯物論的解釈を還元主義的で、アラブ社会が経験している重大な変化の説明には適さないとして退けた。Abdulhadi Khalaf(ルンド大学)が分析したバーレンの事例は、国王の「パンとサーカス」的な政策に抗い、「臣民ではなく市民」になることを求めた指導者たちによる真の政治的反乱の例といえる。Sari Hanafi(アメリカン大学バイルート校)は、政治的主体性の新たなかたちが蜂起直後に現れてきたと主張した。それはいわゆるネオリベラル的な個人主義とは全く対照的に、集合的統一体(collective entities)からの完全な解放を声高に叫ぶのではなく、アクターに自分たちの社会的な繋がりや思慮を積極的に呼びかける。また、必要ならばこうした繋がりのみならず集合的統一体それ自体も変えるよう促しているのである。Hanafi報告は、こうした「再帰的個人主義」には宗派間や民族間の分裂を超越する力があり、それゆえに「新たな愛国主義」の途を確立してゆく力があるとした。ただし、実際にそうやってゆくのかどうかは、引き続き行われた議論においてみえてきたように、再帰性の拠点として位置づけられたチュニジアとエジプトでさえ、革命後の投票行動は依然として民族的・宗派的忠誠が大きな決め手となっていたことを考えると、どちらともいえないだろう。

Raquel Sosa Elizaga(メキシコ国立自治大学)とEdgardo Lander(ベネズエラ中央大学、カラカス)は、南米の経験に引きつけ、レジームの変化のみならず社会的な革命の必要性をより強調した。そうするほかに、南米諸国の大部分では(自由)民主制への「交渉による移行」後にも根強く残る搾取と抑圧の構造を克服しえないだろう。Tina Uys(ヨハネスブルグ大学)も、南アフリカにおける「交渉による革命」が一貫して保守的であると、同様の批判をおこなった。

南米でみられるように、武装勢力はレジームの変遷における主要なアクターの一つとして考えられるべきで

ある。Yezid Sayigh(在バイルート・カーネギー中東センター)は、アラブ世界で権威主義的政権が築きあげられる際に軍が決定的役割を果たした結果、ほぼ全ての社会領域に軍が入り込むことになったと指摘した。したがって、民-軍の関係の再構成は、革命後の政権が抱えるもっとも焦眉の、そしてもっとも危険な課題のひとつである。つまりSayighの論点は、長期間にわたり定着している社会利害関係をかき乱さなければならないということは、社会における軍権力を制限するうえで深刻な支障ともなりうるということである。Mona Abaza(シンシナティ大学、アメリカ)は、革命派と軍との間で現在も続く衝突において、公共空間が果たす役割を詳細に検討した。Abazaは、エジプト軍はまだ民主制の管理下にあるとはいいがたく、自らのために権力を握ろうとしているという「革命後に関する考察」を示した。

トルコの民-軍の関係はこれまで、アラブ世界のモデルとなりえそうなものとして持ち出されることが多かった。この点がDilek Cindoglu(ビルケント大学、アンカラ)から問題提起された。Cindogluは、トルコ民主政の難点を複数示し、「性差を考慮しない民主化(gender-blind democratization)」に特に注意を促した。Fatima Kubaisi(カタール大学)とJan Marie Fritz(シンシナティ大学、アメリカ)は、過渡期にある女性の役割をより踏み込んで検討した。そこでFritzは、社会変化のための「機会の窓」を提供する政治的变化の契機と女性のエンパワメントとに本来的に備わる原理的な相関を指摘した。

民主的な変化を進めるうえで、権限を与えて(エンパワーして)いくのは誰であるべきかという問題に関して、Justin Gengler(カタール大学)は、市民参加が民主的価値の認識の拡大となると考える従来の学知に異議を唱えた。Genglerは、「世界価値観調査」のデータに基づくと、少なくともカタールでは市民団体それ自体は民主化の経路とはならず、それどころか顧客政治的構造に接近しやすくなるという論争的な仮説を展開した。Goran Therborn(ケンブリッジ大学)はGenglerの論点を拡げ、民主主義国でも市民団体は真に民主的な価値というよりも、個別的な利害が代弁される領域

の最たるものとなっていると論じた。

閉会演説では、Michael Brawoy(カリフォルニア大学バークレー校)は、蜂起に関する体系的な比較研究への途を固めた主催者Hanafiの「天才的手腕」を称賛した。本大会は、まだ様々な国や地域の民主化の経験の総体を提示しえなかったとしても、実に比較研究への重要な一歩であった。初めに、「アラブの春」に対して他の場所での経験からどんな結論を引き出せるのか、国や地域の特質を主に扱う報告や議論が大部分であるゆえに、詳細であっても革命と民主化に関する経験的知識の体系化ではなく孤立した事例研究になってしまうのではないかと心配する声もないわけではない。したがって、すべてのレジームの変化を過度に単純な因果関係論に仕立てあげる罠に陥らないよう、レジームの変化の比較分析に関するより包括的な枠組みを今後も発展させていかななくてはならない。ただし、アラブの革命に典型的にみられた自発性は、(疑似)決定論的モデルからは捉えきれない。むしろそれは、Goran Therbornが述べたように、「人間の行為主体性の予期不可能性」に帰せられるべき点に留意を要する。だからこそ、それと関連した話のなかでNahla Chahal(アッサフィール新聞社)は、政治的变化の支持を論ずる者がこうした実に歴史的な瞬間にある機会を理解し、理論考察を革命実践に移してゆくべきだと、私たちに念を押ししたのであった。(佐藤崇子訳) ■

> One or Many Sociologies?

A Polish Dialogue

一つの社会学か、あるいは多くの社会学か——ポーランドからの議論——

by Mikołaj Mierzejewski, Karolina Mikołajewska, and Jakub Rozenbaum, Public Sociology Laboratory, University of Warsaw, Poland¹

ミコワイ・ミエジエウスキ、カロリナ・ミコワイエヴスカ、ヤクブ・ロゼンバウム

(ポーランド:ワルシャワ大学公共社会学研究室)



A Global Dialogue Symposium in Warsaw on the Future of Sociology.

不 平等な世界における社会学のあり方に関する活発な議論と共に、グローバル・ダイアログ第2巻2号はポーランド語によって公刊された最初の号となった。学生によって組織された公共社会学研究室¹)において作業を進めるポーランドの編集チームは、この世界レベルの議論をよりローカルな文脈でとらえることを決めた。我々はピョートル・シュトンプカPiotr Sztompkaとその論敵によって提起された問題に関して、ポーランドの観点から考えるセミナーを企画した。

セミナーのミーティングは2012年の1月19日に行われ、それは学生や博士候補者たちの関心を、また様々な分野の教授らの関心を、学内外問わずに集めた。セミナーの参加者は自由に意見を表明したが、三人のゲストが話題提供者として招待されていた。アンナ・ギザ＝ポレシュチュクAnna Giza-Poleszczuk教授は家族社会学と社会的紐帯の名高い専門家であり、ポーランドのNGOでも活動している。元ポーランド社会学会会長のアントニ・スウェクAntoni Sulek教授は、方法論と世論の理論、ポーランド社会学

史を専門としている。イザベラ・ワグナーIzabela Wagner博士の主な研究領域は科学者と音楽家の専門職キャリアである。ワグナー博士はフランス国立社会科学高等研究院(EHESS)、ハーバード大学とともに、フランス、ポーランド、米国において調査を行っている。

セミナーでの議論では、社会学領域における対立から2011年にポーランドで導入された科学と高等教育に関する改革にまで至る、幅広いトピックが扱われた。しかし主として焦点が当てられたのは、単一の普遍的社會

>>

学は可能か(あるいは望ましいのか)、それともローカルな問題に取り組むローカルな社会学を奨励すべきなのか、という問いである。言い換えれば、我々が答えようと試みた問いは、セミナーの題目たる「一つの社会学か、あるいは多くの社会学か」である。

まずワグナー博士は、社会学者間にある分裂と不平等の多次元性を示した。南北や東西、エリートと非エリートの対立があるだけでなく、理論家と「エスノグラファー」すなわちフィールドワークから始めて理論に至る人々との対立もまた存在するのである。ワグナー博士によると、シュトンプカとマイケル・ブラヴォイ(彼らの考え方はその学問上のキャリアと社会的な背景とを大いに反映している)とは、これら二つの立場の典型である。さらに彼女は、社会学の状況を分子生物学の状況と比較した。かつて分子生物学は、人工的な実験室環境と「試験管内での」方法による研究が行われていた。後にそれらの多くが人工物を生成していたことが明らかになる。その結果「生体内での」方法が復権した。たとえより多くの費用を要し95%の実験が失敗に終わるとしても、「生体内での」方法は実証的なリアリティに基づいた知識と理論を生成するのである。「試験管内での」方法は社会学における理論的なアプローチに似ているが、「生体内での方法」はエスノグラフィに近い。それはアприオリに設定された仮説がより少なく、理論がフィールドワークを通じて引き出されるからである。ワグナー博士は、社会学が生物学と同様の転換期を迎えることを望むと述べた。

スウェク教授は、我々の問いに対して異なるアプローチを提案した。それは社会学を「社会の科学」ではなく「社会を語る科学」と定義することである。したがって彼によると、我々は社会の多様性を論じるだけでなく、社会学的研究に用いられる「言語」の多様性を論じることも可能だというのだ。前者、すなわちどれほど深遠に諸社会は異なっているのかというのは、おそらく解決しがたい理論的な問題であろう。しかし、我々が用いる社会学の言語を考慮するならば、普遍と個別の対立は誤ったジレンマであると考えられるという。スウェク教授は、二つの並立する「社会的回路」があ

ると提案する。一方は完全に学問的なものであり、社会学者はその回路で互いに語り合う。この回路では、英語で発表することが受け入れられるだけでなく望ましいことでもある。すなわち「社会学者は世界に語りかける、誰でも世界に語りかけるには世界的な言語を用いる」。その狙いは、ローカルな経験を文脈に影響されずに社会学理論の言語で伝えることにある。しかしながら、もう一つの回路がある。社会学者が己の社会に語りかける回路である。社会学の重要な役割はこの回路にある。スウェク教授によると、これを実現する最良の方法は「社会的な著述」、すなわち研究者向けではなく一般の読者向けに書かれたテキストである。けれども、テレビに出演する「メディア上の社会学者」の役割と混同するべきではない。このような人々は学者というよりも有名人に似ている。

ギザ＝ポレシュチュク教授もまた、異なった社会学の見方を提案した。彼女は、我々が普遍的社会学を探究する際に念頭におくべき3つの重要な問いを提起した。第一に、あらゆる人々が、普遍的知識に関する自分自身の見方を発表する同様な機会をもっているだろうか。この単一の科学を独占する「強奪者」から我々を守るメカニズムについては、考えられているだろうか。第二に、社会的なアジェンダは誰が設定するのだろうか。この単一の「知識の泉」において、誰がいかなる問題が重要であると決定するのか。第三に、我々はつねに同じ物事について語っているのだろうか。諸社会の違いは普遍的なロジックの「現れ方」に影響を与えるだけではない。理論は我々の世界をみる見方にも影響している。確かに、いくつかの理論は単純に不適切である。たとえば、自由市場の存在しない国における新古典派経済学のように。

ギザ＝ポレシュチュク教授は、近年の公共社会学の枠組みによるポーランド高等教育改革論争にも言及した。報告後の議論において、公共社会学研究室の指導員(mentor)であるマーツィ・グデュラMaciej Gdula博士は、改革がポーランドの大学生活を全く変えたと論じている。改革は、報酬の重みづけの仕方によって、ポーランドの学者をアメリカの学者に変えよう

と試みるものである。すなわち、その社会での問題との関連で卓越した学術的活動を行うことや学生を教えることよりも、国際的なサイエンス・インデックスで認められた雑誌に論文が掲載されることを重視している。結局のところ公共社会学は、国際的な出版システムでの評価を求めめるものではなく、むしろローカルな文脈において様々な社会的なアクターとの紐帯を構築することを目的としているのである。

学術的な従属と批判的な社会学についての考え方は、ポーランドの学術制度状況を研究する上で、もう一つの実りある分析枠組みを提供する。しかしながら、セミナーは題目に掲げた問いに対して明白な回答をもって結論とすることは出来なかった。それは、ジェフリー・C・アレグザンダーJeffrey C. Alexanderがグローバル・ダイアローグの最新号(第2巻3号)で述べていることによる。すなわち、普遍主義と個別主義との論争は、決着をつけることの出来ない問題であるが、定期的に異なる文脈に応じて再検討しなければいけない問題ではある。我々にできることは、何らかの共通の基盤を見いだそうと試みることだけである。それはスウェク教授がセミナー閉会の辞で述べたことだ。スウェク教授の提言によると、最も重要なことは「良き」社会学を実践することである。我々は自らの学問的な卓越の基準を自由に設定する。何が価値ある研究であるのかは、これらの基準に従うのである。

この結論は極めて重要である。社会学は特定の「良き科学」として定義されたあり方に合わせる必要などない。しかしながら、たとえ公共社会学の道を選んだとしても、たとえローカルな問題を扱う「ローカルな社会学」を展開するとしても、自らの研究を科学として評価する基準を開発し、かつ適用すべきなのである。(井出知之訳) ■

¹ 公共社会学研究室(Kolo Naukowe Socjologii Publicznej)は、ワルシャワ大学社会学研究所に設立された学生の学術組織である。連絡は public.sociology.kn@uw.edu.pl までメールにて、あるいは <http://www.facebook.com/socjologiapubliczna> を参照のこと。

² ポーランドの改革についてさらに詳しく知りたい場合は、ISAのブログ (<http://www.isa-sociology.org/universities-in-crisis/>)掲載のIzabela WagnerとAnna Szoluchaによる記事を参照のこと。

> A Bunch of Kids That's Who We Are!

ただの若者連中——これぞ私たち!

by Reyhaneh Javadi, University of Tehran, Iran
レイハネ・ジャバディ(イラン:テヘラン大学)

本チームの序論(『グローバル・ダイアログ』(Global Dialogue)2号および3号)の翻訳をしている際に、私は——パウリスタチーム(the Paulista team)を思い出しながら——博士学位とその研究領域を読みつつ、次のことを思いました。「なんてことだ!これだけの博士号所持者や教授たちばかりのなかで、私たちは何をやっているのか?私たちはただの若者連中じゃないの!」

そう、これこそが私たちです。社会学に関心をもつ(とても)若い研究者たちの一団で、より良い研究環境で学ぶにふさわしい力があると自負しています。だから、私たちはテヘラン大学・学生社会学会(the Student Sociological Association of the University of Tehran)を結成しました。私たちは公式教育の欠点を見定め、それに異議を唱え、代案を作り上げようとしています。私たちメンバーは、私たちの大学の社会学部の学生投票によって選ばれました。任期は一年です。

昨年、私たちの団体は、数年の休止を経て活動を再開しました。私たちの委員会には昨年、次のような人たちがいました。サグアール・ボゾルギ(Saghar Bozorgi)、ナジメ・テヘリ(Najmeh Taheri)、エラヘ・ヌーリ(Elahe Noori)、ミトラ・ダンシュバー(Mitra Daneshvar)、ファエゼ・ハジェゼイド(Faezeh Khajezade)、ソメイア・ロスタンプール(Somaieh Rostampour)、レイハネ・ジャバディ(Reyhaneh Javadi)です。現在のチームは一か月前に始動しました。委員会の新人は、卒業生に代わって入った人たちで、ナスタラ

ン・マフモウドザデ(Nastaran Mahmoudzadeh)、タラ・アスガリ・ラレ(Tara Asgari Laleh)、ザーラ・バーバイ(Zahra Babaei)です。委員会のメンバー全員が学部生で、二人だけ修士の学生がいます。そして、私たちは全員女性なのです!

私たちの団体はまず、古典社会学と現代社会学の諸研究を読む研究グループを作ることに尽力しました。そして、イランの宗教についての社会学といったワークショップを開催したり、社会問題を探り上げた写真展を運営したり、マイケル・ブラウオイ(公共の社会学)やジュニファー・プラット(歴史社会学)を含む、何人かのゲストスピーカーの見識を学んだりしました。申し遅れましたが、私たちは『サレ』(Sareh)('純粹'の意)という名の、学生による社会学雑誌を発行しており、各号は二部構成になっています。前半は、私たちの学部における社会学教育の状況に対する批判的アプローチで、後半は、ある社会学者の論文もしくは著書の一部の翻訳から成ります。

『グローバル・ダイアログ』(Global Dialogue)を翻訳することは、私たちの団体の役目の一つです。他のチームと異なり、私たちは翻訳者を協同作業で選ぶやり方を行っています。実際、この活動は、私たちの意欲を非常にかき立てました。だから、毎号、私たちは学部に通通知し、見本ページの翻訳に関心を持った学生全員に翻訳を依頼します。記事毎に、私たちは最も良い翻訳見本のうちから翻訳者を四人選ぶのです。ここで、翻訳チームを簡単に紹介させていただきます。



レイハネ・ジャバディ(Reyhaneh Javadi):テヘラン大学(UT)修士課程在学中。彼女は、UTで社会学士を取得しました。研究領域は歴史社会学で、19世紀から20世紀初頭にかけてのイラン改革を専門としています。



ジャラル・カリミアン(Jalal Karimian):シャヒード・ベヘシュティエー大学(SBU)哲学修士課程在学中。彼はUTの社会科修士を授与されました。最近では、実存主義哲学と宗教の現象学を研究しています。公共社会学にも関心があります。



シャールード・シャフバンド(Shahrad Shahvand):テヘラン大学国際関係学修士、ペルシャ湾大学(PGU)化学工学士を持っています。彼は現在、南アジア、とりわけパキスタンの宗教、文化、政治に関心があります。



サグアール・ボゾルギ(Saghar Bozorgi):テヘラン大学社会学部在学中。彼女の研究関心は歴史社会学で、近代イランを専門にしています。

>>



ナジメ・テヘリ (Najmeh Taheri) :
テヘラン大学社会学部在学中。



タラ・アスガリ・ラレ (Tara Asgari
Laleh) : テヘラン大学社会学部
在学中。



ファーマテ・モグハダシ (Fatemeh
Moghaddasi) : アッラーメ・タバ
ーイー大学 (ATU) 社会学修
士課程在学中。彼女はテヘラン大
学で社会学士を取得しました。主
な研究関心は、教育社会学と公
共社会学で、イランにおける公
社会学の歴史を専門とし、教育制
度を通じた公共社会学の拡充を
行なっています。



ゼイナブ・ネサル (Zeinab
Nesar) : テヘラン大学社会学修
士課程在学中。彼女はテヘラン大
学で社会学士を取得しました。現
在、ジェンダー研究を行なっています。



ファエゼ・エスマイリ (Faezeh
Esmaili) : テヘラン大学社会学
修士課程在学中。彼女はSBUで
社会学士を取得しました。パフラ
ヴィー政権下の社会政策を研究
しています。



ミトラ・ダンシュバー (Mitra Dane
shvar) : テヘラン大学社会学部
在学中。彼女は若者の逸脱を研究
しており、とくにイランにおける死刑
制度を専門としています。

『グローバル・ダイアログ』(Global Dialogue)という素晴らしい経験に参加させていただき、私たち一同、大変うれしく光栄に思っています。(堀田裕子訳) ■

> The Global Place of French-Speaking Sociology

フランス語圏社会学のグローバルな居場所

by André Petitat, University of Lausanne, Switzerland, and AISLF President
アンドレ・プティタート(スイス:ローザンヌ大学、フランス語圏国際社会学会(AISLF)会長)



Georges Gurvitch (1894-1965) – Russian-born French intellectual and distinguished sociologist of his time – was a leading figure in AISLF.

フランス語圏国際社会学会の第19回大会は「不確実性 (Penser l'incertain)」というテーマで、2012年7月2~7日にモロッコのラバトにて開催される。ISAのメンバーでもあるAISLFはアメリカの軍事的、経済的、技術的、科学的ヘゲモニ

ーという文脈の中で、1958年に設立された。1950年代には院生やポストクの研究者がアメリカの大学に留学する機会を探し始めていた。だがこれは、当時のヨーロッパ社会学がコンフリクトや社会変動に過度に敏感であったために、アメリカで優勢であった機能主義的画一化や統計的経験主義の方をむしろ皆が好むようになった結果である、ということでは必ずしもない。AISLFを主導するジョルジュ・ギユルヴィッチは、アメリカの証拠主義や数字への偏愛を批判したソロー

>>

キンの議論を、ギェルヴィッチ独自の
方法で発展させて議論している。[赤
狩りの]マッカーシーの攻撃的非難は
1954年には終息したが、その痕跡は
今なおアメリカ社会学に残る。

フランス語圏社会学の国際的な
場所を作り出す決意をした大きな要
因の一つは、もちろんアメリカ社会
学が言語的偏向をもっているという
こともあるが、理論的またはイデオロ
ギー的な距離もかなり大きいという
ことにある。そのため、AISLFという
存在は、言語的な政治を司る行為で
あると同時に、科学的な政治を表出
的に行うということでもある。したが
って、その組織目標は人をつなげて
いくことによって、社会学的研究の多
様性と言語的な多様性を防衛するこ
とに置かれている。

AISLFはアカデミックな友人づき
あいから長い年月をかけて、50か
国以上の国から1800人以上の会員
が集まる学会へと成長した。地域や
国単位の学会ではなく、文化的言語
的空間の学会として、もちろんそれ
はリアルでもヴァーチャルでもありう
るのだが、フランス語を全面的にま
たは部分的に使っている国や地域、
教育プログラムや研究センターから
成っている。中には非フランス語圏
の国に住んでいるフランス語話者も
いれば、フランス語を愛好している
が身近にフランス語環境がないと
いう社会学者も参加している。この「
地域的言語」による学会には50を超
える大変活発なテーマ部会があり、
「社会学Sociologies」というオンラ
イン・ジャーナルも発行している。ま
た、大学院間の国際ネットワークで
あるRedocを通じて若い研究者の育
成にも積極的に取り組んでおり、毎
年サマースクールを開催している。
学会活動の詳細については半年ご
とに発行されている会誌Lettre de
l'AISLFにまとめているので、ご興味
のある方はぜひAISLFのウェブサイト
(aislf.org)を参照していただき
たい。

また、AISLFはフランス語圏社会学
のさまざまな「学派」が対話すること
のできる、党派の偏りのない国際的
な場所としても使われている。この
ような形で、社会学の複数性を擁護
し、研究部会内の議論も活性化する
という、設立当初から変わることの
ない学会目標を今も推進しているこ
ろである。さらに、地域言語による
学会は新しい概念やパラダイムが自
生し、国際的に花開いていく機会も
提供することができる。というのも、
そうしたことは一国内部の文脈では
少し狭すぎて発展する余地が十分
に確保できないことも多く、社会学
的な多様性を促進するためにはこう
した言語的に近接した領域が必要と
なるからである。ISAの重要なタスク
の中に、大小の多孔質をもつ地域間
の対話を促進することが挙げられて
おり、それはブラウホイ会長がグロー
バルな問題群と対峙しようとする際
に目指しているものでもある。

言語的圏域には明らかに不平等
や階層性がある。こんにちの世界で
トップに君臨しているのはもちろん
英語圏である。そのヘゲモニー自体
も多重に重なり合う状況や過程によ
って作り出された側面があり、トップ
に君臨する英語圏にヘゲモニーが
あるということを見出すことによっ
て、フランス語圏を含むさまざまな
言語の内部にも階層性や不平等が
あることを忘れるべきではない。セ
ネガルやモロッコの人々がフランス
語で考えて書くということは、フラン
スやケベックの人々にとってのもの
と同じであるわけではない。現実の
世界ではわれわれは、それに付随す
る不平等とともに言語的ヘゲモニー
の階層性に接しているのである。

AISLFが設立された当時の文脈は
既に変化している。アメリカ社会学は
当時よりも多様化し、合理的行為者
と相互作用主義という二つの概念は
アメリカ社会学から世界中に輸出さ
れたもっとも成功した例である。もち
ろん、この二つの概念は今日のフラ

ンス語圏社会学の重要な側面として
組み込まれている。そうした成功は
おそらく社会学の下位領域の分断化
と関係しているだろう。

50年代から70年代にあった二極
的な世界は既に消滅し、多極的な世
界にとって代わられた。われわれは
文化的多元主義として公的に認識さ
れている世界の中に、その中ではこ
れまでになかった規模でグローバル
な相互依存が進み、ヒト、モノ、カネ、
情報が加速度的に流動しているもの
としてかろうじてつかむことのでき
るような世界の中に住んでいる。そ
して、技術や科学のもつ威力もわれ
われの学問の創始者たちが想像し
たものをはるかに超えた時代に住ん
でいる。デカルトの見た技術-科学の
夢("lords and masters of nature")
とも関係の深い、レッセフェールの
自由主義プログラムは世界の経済と
生態系に不確実性を生み出した。そ
のどちらかが危機に陥っていく中で、
われわれはわれわれ自身の矛盾と
残骸の中に埋もれないようにするた
だそれだけのために、グローバルな
制御を新しく要請しようとしている。
ラバトで開く第19回大会を「不確実
性」のテーマで組織するにあたり、社
会学者こそが、現在われわれが囚わ
れている狭い道筋からの突破口を
みつける特別な役割を果たすことが
できると、われわれは信じている。(池
田和弘訳) ■

> More on AISLF from the Archives

アーカイヴからAISLFをさらに知る

by Jennifer Platt, University of Sussex, UK, and ISA Vice-President for Publications, 2010-14
ジェニファー・プラット(イギリス:サセックス大学, ISA出版担当副会長 (2010-2014年))

本

稿は、AISLFとISAとの長い関係についてデータと予備知識を少し足してAndre Petitatの記事を補うものである。この両者は、かつては内部摩擦のみえる関係でもあった。1949年のISA発足は、UNESCOによって手掛けられ、その本部はもともとパリにあった。そのため、フランス語はそこで実質的に重要であると同時に、公的地位を占めていた。もっとも、この特別な地位は第二次世界大戦後にアメリカの国際的優越によって変わりはじめたが、歴史的にはフランス語は国家間外交の言語であった。ISAの2つの公用言語も、フランス語と英語だった。重要な初期社会学が展開された他の国の言語は、大戦中ファシスト側についたために顧みられなかったのである。ISAがUNESCOから独立していくにつれ、フランス語の業務上の実質的重要性は減っていった。そしてその反動として、1954年には、フランス人社会学者Georges GurvitchがISAのフランス語部会を提唱した。だがこの提案は、国際主義精神を崩しかねないと却下された。こうして1958年に、AISLFが独立して発足した。それは、Gurvitchとベルギー人社会学者Hanri Janneによる主導のもとでなされた。しかしながら、1963年までは、AISLFは団体メンバーとしてはISAと協調していた。おそらく、当時ISAとの合同書記を務めたGirodがAISLFの理事でもあったことが役立ったのであろう。

ISAの活動の通常の形態は、ナショナルな貢献に留まることが多いが、地理的位置づけではなく言語的位置づけを考慮に入れると、その構図は少し違って見えてくる。Petitadが指摘する通り、フランスのみが唯一のISAへのフランス語圏の貢献者であるわけではない。フランス語圏のカナダ、ベルギー、スイスが特に顕著であ

る。1949年から1956年まで、ISA理事はアメリカ人が務めていたが、当時の副理事のなかにはフランス人のGeorges Davyもいた。そして1956-59年にはGeorges Friedmannが理事となった。その後、次のフランス語圏出自の会長は、2006-10年にMichel Wieviorkaが就任するまで長い空白期間があった。とはいえ、その間も少なくとも一人のフランス語圏出自者が必ず理事となっており、11期のうち7期はフランス語圏出自者が副会長であった。

(通常、二言語を話す国である)フランス語圏では、これまでに3度の世界大会(1953年リエージュ、1966年エヴィアン、1998年モントリオール)が行われ、三つの事務局(1959-62年ルーヴァン、1962-67年ジェノヴァ、1974-82年モントリオール)が現在のマドリッドに確定するまで存在した。フランス語圏の国の出自ではなくとも、卓越したISAの会員のなかには、Anouar Abdel-Malekのようにパリで何年も仕事をしたり、パリとの繋がりを強く長く保っていたりする人がいることも、特筆に値する。同様に、ベルギーからケベックへと赴いたJacques Dofnyのようなフランス語圏の移民も、重要なリンクをつくりだしてきた¹)。このように、言語の紐が連携を生み出す働きをするのと同時に、それが別個のアイデンティティを示すことになるということも、ここから窺えるであろう。(佐藤崇子訳) ■

¹ 彼の役割の興味深い説明に関しては、次の文献を参照されたい。「Entrevue avec Jacques Dofny, professeur et bâtisseur», *Sociologie et sociétés* 23 (1991): 61-77.

> Challenges Facing the Indian Sociological Society

インド社会学会の課題

by Ishwar Modi, President of the Indian Sociological Society, and ISA Executive Committee Member, 2010-2014
Ishwar Modi(インド社会学会会長、ISA理事会メンバー(2010年-2014年))



Ishwar Modi lighting the sacred and auspicious lamp at the annual conference of the ISS in Jaipur. His Excellency the Governor of Rajasthan, Hon'ble S. K. Singh (center), looks on.

ついて新たに議論を始める必要がある。人々のための社会学が、21世紀のわれわれのモットーとなるべきである。

こうした新たな目標を達成するため、ブラジル、ロシア、中国や南アフリカなどの国々から多くを学ばなくてはならない。東欧諸国のポスト社会主義時代以降のかれらの経験からも、多くのことを吸収できるだろう。東洋諸国、中東、そしてアフリカ社会固有の知的伝統を研究し、オルタナティブな社会学を発展させる必要もある。つまり、われわれがやるべきことは、西洋的社会学のポジティブな面を維持するだけではなく、発展途上国からの教訓を引き出すことである。主流のインド社会学と、インドの地方の社会や文化とのつながりを作る必要がある。これを達成するため、ISSは地方／地域の組織と親密な関係を形成しなくてはならないだろう。そうして、インドの豊かな社会と文化的多様性を結びつけるべきである。

これらすべての方向に向かって、ISSは大きな歩みをしていこうと私は大いに期待している。(三部倫子訳) ■

Reference

Modi, I. (2010) "Indian Sociology Faces the World." Pp.316-325 in Michael Burawoy, Chang Mau-kuei, and Michelle Fei-yu Hsieh (eds.) Facing an Unequal World: Challenges for a Global Sociology (Volume II). Institute of Sociology, Academia Sinica, Taiwan, and Council of National Associations of the International Sociological Association.

インドの社会学の、教育と研究のレベルは、賞賛に値する高い地位に達している。学会設立後60年以上の間、この達成に当たりインド社会学会(ISS)は重要な役割を果たしてきた。私は、2012年1月から1期2年の間、学会長に就任することを大変光栄に思っている。インド社会学会(ISS)には、3500人近い終身会員がおり、またインドだけではなく海外の会員もいる。

だが、今日のインドの社会学は、帰路に立たされている。近年、1世紀の歴史あるカデミックな社会学の専門家集団に、いくつかの課題が浮上してきた。インド社会における植民地という過去の歴史は、いまだに教授法と方法論につきまとい、アメリカ流の学問の優位は、概念、準拠、理論構築など私たちの学問事業に広く行き渡っている。インドの社会学は、インド独自の社会理論と概念の発展にまだ成功していない。もし、

(インドに対する)共感と関心と共に複雑な問題を理解するならば、理性の土着化を現実のものとする必要がある。私たちは、実際的な価値をもつ社会学を発展させねばならない。学会長としての私の方針で、インド社会学の視野を広げるための新しいイニシアティブが議論されている。同時に、インド社会学はグローバルなシーンから無関係なままではいられない。ISSを代弁するものは、学会誌 Sociological Bulletinである。我々はこの学会誌の部数、普及率を上げ、多言語対応にすることで、Sociological Bulletinを本当の意味で国際的な出版物としなければならない。我々は、特集号を出版する必要もある。ベテランの学者は、寄稿を依頼されるかもしれない。電子ジャーナルも、検討すべき議題となっている。Sociological Bulletinの変革に加えて、開発や政治的問題の社会的背景、アイデンティティと文化的主張の新たな局面、中間層の広がり和社会的不平等の拡大、地方—都市間の境界線の変化などに

> Public Sociology at Ankara University

アンカラ大学におけるパブリック・ソシオロジー

by Günnur Ertong and Yonca Odabas, Ankara University, Turkey
グヌー・エルトング & ヨンカ・オバラス(トルコ:アンカラ大学)



Workers huddle in the city of tents created in protest against TEKEL Corporation's labor policy.

私たちは、アンカラ大学社会学部でアイトゥル・カサポグル教授とともに研究を行っている社会学者のグループです。グループには、大学院生、若手の博士号取得者、自立した研究者が加わっています。

私たちのグループは、研究のために多くの人びとがグループへと加わり、さまざまな業績に貢献しながら、それらの経験とともに研究生活を継続していくという、ダイナミックなグループになっています。参加者の多くは、カサポグル教授の指導のもとで博士論文や修士論文を執筆している学生です。それぞれ仕事につくために学部・研究科を離れたときでも、調査研究のネットワークを通じて互いに結びついています。以下では、私たちの調査研究の一部として公開された本、カサポグル教授の演習で私たちが取り組み発展させたフィールド調査、そしてその研究成果を報告しているある雑誌について紹介します。

私たちが出版した本は、アイトゥル・カサポグル教授によるコースの内容が主になっています。これらの本は、学生や研究者の仕事にもとづいて、理論と実践とを統合しています。最初の本である『社会構造変動の性格』は、社会構造の要求による性格変容に関するものです。2番目の『新たな社会的トラウマ』は、社会的トラウマの語りについて考察したものです。3番目は『社会生活と紛争——異なるパノラマ』では、社会生活と紛争を取り扱い、最後の『コインの両面——健康と病』では、健康と病の社会学の領域に焦点をあてています。カサポグル教授によって組織されたこのセミナーのなかで、学生は関連論文にあたり、そして新たなアイデアを出し合い、同僚とともに討議するよう指導されていきます。卒業・修了した後も、かつての学生がこのコースに参加し続け、さらなる新しい参加を促しています。

もっとも最近に私たちが行ったフィールド調査は、2009年12月のTEKELストライキに着目したものでした。TEKELは、煙草およびアルコール飲料を扱う巨大な旧国営企業で、ストライキはトルコの首都アンカラで78日間続きました。

た。TEKELの労働者の地位・状態に関する変化がこのストライキをもたらしました。1990年代からの民営化の始まりと、公的部門における労働力コストの増加は、下位企業によって雇われた契約労働者の大規模な使用をもたらし、その結果、被雇用者として保障された労働者の割合が急落したのです。

こうした「フレキシブル化」への労働者の抵抗戦略は、2009年12月14日にアンカラで開始され、治安維持勢力の抑圧的な戦術がその引き金となりました。寒天のもと政府からの回答を辛抱強く待つため、TEKELの労働者たちは抗議を行っていたストリートにテントの都市を建設し、このことが人びとの関心を集めました。政府のヘゲモニーにも関わらず、TEKELのテント労働者たちは、研究者やアーティストや学生から多くの支援を得たのです。私たちのグループもその場に身を置き、H.ブルーマーの群衆動員モデルを応用したフィールド調査を行いながら、労働者を支援しました。この調査の結果については、2011年9月にジェノバで開催されたヨーロッパ社会学会の会合で報告しました。

「Yurt ve Dünya (Homeland and the World)」は、2010年にwww.yurtvedunya.net 上で公開されたオンラインジャーナルです。しかし、この雑誌はもっと長い歴史をもっており、人文学研究部門の公共社会学者だったベヒセ・ボランの指導の下で、1941年に創刊されたものです。私たちはM.ブラウオイのパブリック・ソシオロジー運動に鼓舞され、社会学部の幾人かの大学院生と教授のエネルギーに支えられて、この雑誌を2010年に再刊することを決めたのです。この雑誌のねらいは、学術的な調査を学術以外の世界の人々と共有することであり、まずはトルコの他の社会学部の学生たちとの共有が目指されています。

私たちは、国際社会学会 (ISA) およびヨーロッパ社会学会 (ESA) のメンバーであり、パブリック・ソシオロジーでの取り組みをさらに国際的な領域へと広げていきたいと考えています。また、地域的あるいは国際的なレベルと同様に、国内レベルでのコラボレーションの重要性を強く確信し、国内研究組織においても積極的に取り組んでいます。

私たちは、共同研究の文化を発展させてパブリック・ソシオロジーを生み出していく仕事にわくわくしています。こうした仕事やグループとの交流に関心がある方は、以下に記す私たちの連絡先にご連絡ください。(岩館豊記) ■

Aytül Kasapoğlu: kasap@humanity.ankara.edu.tr
Yonca Odabas: yoncaodabas@yahoo.com
Günnur Ertong: gertong07@gmail.com

> Democratizing Futures: Searching for Equality and Participation

未来を民主化する: 平等と参加を求めて

by Markus S. Schulz, University of Illinois, Urbana-Champaign, USA, and Member of the ISA Program Committee for Yokohama World Congress, 2014
マークス・S・シュルツ(米国: イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校、世界社会学会議2014年横浜大会プログラム委員)



Mothers of the Plaza de Mayo, Buenos Aires. Photo by Markus Schulz.

ISAの未来研究部会(RC07)は、来るブエノスアイレスのフォーラムに向けて、「未来を民主化する Democratizing Futures」という標語でプログラムを組んでいる。この標語はフォーラム全体のテーマである「社会正義と民主化」と研究部会独自の視点をつなぎ合わせたものである。英語の表記に表れているように、そこには二つの意味が込められている。すなわち、“democratizing”を形容詞として読むと、より民主化の進んだ未来が訪れることへの願い

が表れる。同じく、“democratizing”を動詞として読むと、未来を思い浮かべ、作り上げていく、まさにそのプロセス自体を民主化することが企図される。ゆえに、未来を民主化するということは、正義と参加を社会的に探求することにつながっていくのである。他方、未来futuresの方も普段はあまり使われることのない複数形で表記されている。Arturo Escobar, Anibal Quijano, Walter Mignolo, Boaventura de Sousa Santosといったポストコロニアルの学者

たちが議論してきたように、われわれは多様性をもった知の複数の認識論を必要としている。単線的なモデルは、その論理の簡潔さが称揚されるものの、われわれが知っているように歴史を記述することはない。かなり輪郭がつかみにくく、ときに論争的であるような複数のリアリティをつかまえるには、単線的な歴史を横切る概念群の方が適しているように思われる。未来を民主化するということは、別様の視界の開け方について対話することを暗示しているのである。

>>



1990年代には、未来の取りうる幅はそれほど大きくないように思われた。というのも、世界中の国々において硬直した市場モデルに経済の構造をあわせるために用意されたレシピが、いわゆるワシントン・コンセンサスによって新自由主義として処方されていたからである。その結果、グローバル・エリートたちがサミットの密室会議用を選び出したシアトル、プラハ、ジェノア、ダヴォスといった大都市の上には、チアパスの密林のような地の底から湧きあがる大量の不満が降り積もった。「対テロ戦争」の名のもとに世界中に展開された恐怖政治は、新自由主義の支配をさらに押し広げ、金融市場に投機の嵐が吹き荒れて、しまいには大手メディアでさえも「資本主義の崩壊」を公然と語り始める。巨額の銀行救済策がすぐに組まれたからしても、そうした見出しはもちろん時期尚早であったと言えるが、経済体制の正統性がいかに怪しげであるかを示すものではあった。イラク侵略の結果として、アメリカのパワーは衰え、それと入れ替わるように中国その他の新興国家が台頭し始める。南アメリカでは、東のブラジルから西のエクアドル、南のアルゼンチンから北のベネズエラ、多くの国々がIMFや世界銀行の「条件」を跳ね返す新しいレバーをみつけ、独自の途を模索し始めた。アラブ世界でも長く君臨した独裁者を反乱によって引きずりおろし、地域の民主化に向けた新しい空間を切り開いている。一連の動きは民主化の成功例として世界中に反響し、アメリカ国内にも影響を与えていった。

ウォール街での小さな抗議行動が全米規模の運動へと発展し、ヨーロッパやその他の国々のカウンターパートと手をつないだ。大手メディアは、要求のリストがないことを理由に占拠運動を嘲笑していたが、逆に言えば、固定したイデオロギーが存在しないということ自体がこの運動のアピール力に大きく貢献していた。特に象徴的なことに、ニューヨークのリバティ・スクエアを占拠したことは、新しい対話の空間が開かれたことを意味していた。もちろん、アメリカの各地で生じた数多くの広場の占拠も同様の意味をもっている。占拠運動の舞台となったニューヨークのズコッティ公園は「半公共的」スペースとして民間によって運営されていたが、それまでは民主化や運動といったことにはあまり縁のないところだった。そのズコッティ公園が突如として活気のある公共空間へと変貌した。芸術や音楽に満ち、食べ物がシェアされ、情報が行きかい、もちろん政治的な討論も活発に行われる。もっとも裕福な1%の人々のためだけではなく、残りの99%の人々のためにもよりよい未来をどのように作っていけばよいのか。段ボールでできた手作りのプラカードが示しているように、討論された要求や主張の多くはきわめて具体的な内容をもっており、公平な経済、清浄な環境、税制の改革、選挙運動資金取締法など多岐にわたっている。運動の水平的な組織化それ自体が民主主義の再生という目標地点を指し示している、と言ってよいだろう。広がっていく社会的不平等と強化されていく政治への企業の

影響力とに対して、占拠運動は挑戦したのである。警察は、占拠された空間から群衆を追い出し、立ち入り禁止にすることによって、アメリカの多くの都市で鎮圧に成功した。だが、今回の出来事によって、新しい世代の運動家が集合行動を組織する経験を積んだことで、今後もより民主的な未来を希求し続けることができるだろう。

社会学はこの運動から、未来は鍛錬できるということを学ぶべきである。プエノスアイレスのフォーラムでRC07が組織している多岐にわたるセッションの中では、次のような問題群が議論される予定である。いかにして民主的な未来を創造することができるのか。未来についての前提や希望は、日々の生活や長期の集合的な生活にどのような影響を与えるのか。社会的想像力の地平をどう定義するか。グローバル化が進んだ時代に民主主義を再考するという事は、どのような思考を必要とするのか。地球的な気候変動や環境悪化、貧困や暴力といった差し迫った問題に対して、持続可能な方法で取り組むにはどうしたらよいか。ガバナンス、インフラ、生産様式、メディア、技術といったものを民主化するためには何がなされなければならないか。商品やリスク、機会をより衡平な形で分配するためにはどうしたらよいか。未来を形作ろうとする勢力間の構図はどうなっているのか。社会的な闘争を異なる国や状況において比較することによって、何を学ぶことができるのか。解放運動や草の根の活動はどのように規律や搾取、誤解に抵抗しているのか。想像可能で、望

ましく、達成しうるものとして、どのような代替的未来をわれわれは描くことができるのか。社会変動のロードマップはどのような形になるか。そして、未来を志向する社会研究は、いかにしてより広い公共的討議へとつないでいくことができるか。

Alberto Bialakowsky、Alicia Palermo、Margaret Abraham、Michael Burawoy、Raquel Sosaの献身的な仕事と、アルゼンチンのフォーラムを作り上げていく知的な熱意に深く敬意を表したい。数多くの白熱した議論や刺激的な邂逅が繰り広げられることを期待しよう。みなさん、ブエノスアイレスでお会いしましょう。(池田和弘訳) ■